大正國語讀本

修正版

巻十

375.9
H019
資料室

42022
教科書文庫
4
810
H-1918
200030
2246

資料室
375.9
H019

大正七年十二月二十壹日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編　修正版

大正國語讀本

東京　合資會社育英書院發兌

廣島大学 教 38327

大正國語讀本（修正版）卷十

目次

一　神武天皇……新保磐次……一
二　大禮壽詞……大隈重信……七
三　人生の快事その一……三宅雪嶺……一一
四　人生の快事その二……一六
五　人生の快事その三……二一
六　萬葉集の歌（韻文）……（萬葉集）……二七
七　落花の雪……（太平記）……三二
八　近世の儒學……（日本儒學史）……三六

九　人生と四季……坪内雄藏…四四
一〇　月は世々の形見……室鳩巣…五〇
一一　月花のことわり……村田春海…五六
一二　村時雨……（增鏡）…五九
一三　安宅その一（謠曲）……六八
一四　安宅その二……七三
一五　安宅その三……七九
一六　箱根山……賀茂眞淵…八四
一七　菅公の左遷……（大鏡）…八七
一八　赦文……（平家物語）…九四
一九　鬼界が島……（平家物語）…一〇一
二〇　學制に關する意見書……橋本景岳…一〇七
二一　萬里の長城（韻文）……土井晚翠…一一七
二二　會我會稽山その一……近松門左衛門…一二七
二三　會我會稽山その二……一三二
二四　雅文二章……
一　古戰場……井上文雄…一四〇
二　漁村……中島廣足…一四二

廣島大學圖書之印

大正國語讀本（修正版）卷十

新保磐次

一　神武天皇

こゝに宇陀*の兄猾・弟猾といふ酋長あり。天皇先づ八咫烏を遣して、その向背を問はしめ給ふに、兄猾は鳴鏑を發ちて御使を追返しき。さて兄猾は味方の兵を集めしに、はかばかしく集らざりしかば、僞りて降參の由を申し、新に宮殿を作り、密かに陷穽を設けて天皇を迎へ奉らんと謀れり。弟猾早くより歸順の志を抱きければ、その事を皇軍に密告し

宇陀　大和國宇陀郡にあり。

道臣命　大伴氏の祖。
大來目命　久米氏の祖

けり。之に因つて道臣命は大來目命と共に、御先發として兄猾が許に赴きて諸聲鋭く、「おのれが調進したる新殿は、おのれ先づ御毒味仕れ。」と、劒を按じ矢を注して、左右より詰め寄せ、兄猾を陷穽に追入れてこれを殺しき。

兄猾既に誅に伏しければ、弟猾大いに酒食を設けて皇軍を饗應す。天皇御氣色美しく御歌をよませ給ふ。

「宇陀の高城に鳴羅張る　我が待つや鳴は障らず
いすくはし鯨さやる　たちそばの實のなけくを
前妻が魚乞はさば
こきだひゑね
後妻が魚乞はさば　いちさかきみの多けくを
こきだひゑね
えゝしや可笑しや　あゝしや可笑しや

こは來目歌とて、今も宮中の紀元節の式祭には、此の歌を歌ひて舞ふなり。

國見岳　大和國宇陀郡にあり。
磯城・磐余　大和國磯城郡にあり。
葛城　大和國南葛城郡にあり。
黑坂　大和國宇陀郡に在り。
椎根津彦　一名神知津彦初名珍彦ともいふ神武東征の時速吸門に於て帝に謁し臣となる。

かくて宇陀地方は大抵皇軍に歸したれども、東隅なる國見岳には八十梟帥あり、西の方は磯城に磯城八十梟帥あり、磐余には兄磯城あり、葛城には赤銅の八十梟帥あり。而も宇陀より西へ通ずべき女坂には女軍を置き、男坂には男軍を置き、墨坂には盛に炭火をおこして防禦せり。

天皇天神の夢の御教により、椎根津彦に破れたる衣服・蓑笠を著せて老翁に扮たせ、弟猾を老婆の姿に扮たせ、敵地を過

ぎて天香山に遣し給ひき。虜兵二人を見て大いに笑ひ、「あな醜くの爺婆や。」とて、皆鼻を掩ひ道を開きて通しければ、二人は安々と天香山の土を取りて歸りぬ。

天皇即ち此の土を以て平瓮・嚴瓮等の祭器を造りて、御自ら神祇を祭り、先づ國見岳の八十梟帥を討平げ給ひき。それより磯城方面に進發し給ひしに、忍阪の大室といふ大土窟に八十梟帥等群集せり。天皇謀りて八十梟帥等に饗宴を賜ひ、大來目命の部下なる來目部の勇士を膳夫に仕立てて、各頭椎（クブツチイ）の劍を帶せしめ、八十膳夫と稱して、八十梟帥一人毎に一人を付けて給仕せしむ。豫ねて謀りしことなれば、酒酣なる時道臣命立ちて歌ふ、其の歌、

忍阪の大室屋に　人さはに來入り居り
人さはに來入り居りとも　みつ〳〵し來目の子が
頭椎石椎（イシブツチイ）もち　打ちてし止まむ
みつ〳〵し來目の子らが　頭椎石椎もち
今打たば宜らし

と歌ひ終るを相圖に、八十膳夫は一齊に劍を拔いて八十梟帥を殺し盡しぬ。皇軍勢に乘じて遂に兄磯城等を平げ、磯城以南の地皆定まりぬ。

南方既に定まりければ、天皇諸軍を率ゐて長髓彥を登美*に討ち給ふ。長髓彥は土豪中の最も强雄なるものにして、手痛く戰ひければ皇軍容易く勝つこと能はず、時に金色の鵄

登美　大和國磯城郡にあり。

飛來りて天皇の御弓の弭に止り、其の光電の如くなりければ、長髓彦が士卒驚き異みて、氣勢頓に挫け、皇軍の勇氣再び加りぬ。

只これのみにあらず、往にし孔舍衛阪の戰に、五瀨命の敢なく討たれ給ひしことを、天皇よに口惜しく思召し

みつ〳〵し　久米の子らが垣本に
植ゑし薑口ひゞく　吾は忘れじ打ちてし止まむ

と悲歌慷慨し給ひければ、將卒皆奮勇して、軍氣日に振へり。先に降臨せる天神の裔饒速日命は、御物の天羽々矢と步靫とを見て、天皇が天神の正統なるを知り、長髓彦に歸順を勸むれども、彼が頑なる心は容易に飜るべくもあらず。饒速

孔舍衛阪　河内國中河内郡にあり。
五瀨命　神武天皇の皇兄。

日命到底其の諭し難きを見て遂に長髓彦を殺して歸順しけり。

天皇が日向より興りて、遂に一統の大業を建て給ひし雄才武略は今更申さんも畏し。其の文藻英發に至りては、前例の御製を初め、日本書紀及び古事記の傳ふる所の歌章之を證して餘りあり。是等の歌章何れも眞情流露し、特に格調の雄壯に至りては吾が文學史中、前後之に比すべきものなし。天皇の如きは、實に聖文神武古今に超絕すと申し奉るべきなり。（趣味の日本史に據る）

二　大禮壽詞

臣重信謹ミテ言ス伏シテ以ミルニ
陛下萬世一系ノ　寶祚ヲ踐ミ乾綱ヲ攬リテ坤維ヲ總
ヘ爰ニ天津高御座ニ昇御シ卽位ノ大禮ヲ行ヒ給フ遠
邇瞻仰シ億兆抃舞ス臣重信誠懽誠喜頓首頓首
伏シテ惟ミルニ
皇祖天壤無窮ノ神勅ヲ　皇孫ニ錫ヒテ八洲ニ君臨セ
シメ三種ノ　神器ヲ親授シテ五部ノ神ヲ臣事セシメ
給フ萬世不易ノ　皇基確然トシテ爰ニ定マル
皇宗英武聖明
皇祖授國ノ　宸意ヲ體シ天業ヲ恢弘セムトシ皇師ヲ
帥キテ中州ヲ平定シ　皇位ニ卽キテ萬機ヲ親裁シ大

ニ經綸ヲ行ヒ洪範ヲ　後聖ニ貽シ給フ而シテ　皇孫
ニ奉事セシ諸部ノ子孫亦咸先志ヲ繼キテ皇謨ヲ翼贊
ス億載一統ノ皇業蔚爾トシテ維レ崇シ
先帝登極ノ初復古ノ廟策ヲ定メテ維新ノ皇圖ヲ啓キ
開國ノ鴻猷ヲ宣ヘテ萬邦ノ善長ヲ採リ藩封ノ舊制ヲ
廢シテ一途ノ治化ヲ施シ不磨ノ大典ヲ布キテ立憲ノ
政揆ヲ明ニシ兵制ヲ建定シテ陸海ノ戎備ヲ嚴整シ文
教ヲ闡敷シテ黎元ノ智德ヲ啓養シ產業ヲ殖興シテ厚
生ノ道ヲ擴メ制度ヲ釐革シテ庶政ノ規ヲ宏ニシ給フ
是ニ於テ乎國家ノ綱紀廓如トシテ光張シ邦運ノ旺盛
駸駸トシテ止マス

陛下　大統ヲ承ケ懿績ヲ纘キ給ヒ
皇祖　皇宗暨　列聖ノ宏謨ニ遵ヒ丕基ヲ鞏固ニシ德
光ヲ宣揚シテ天職ヲ全クセムトシ宵衣旰食　聖衷ヲ
勞シ給フ今大禮ノ吉辰ニ方リ明詔ヲ下シテ肇國ノ大
本ヲ申明シ臣子ノ恆道ヲ提誨シ給フ臣等感激已ム無
シ
伏シテ見ミルニ
陛下仁孝恭儉ノ天資ヲ以テ至隆ノ治ヲ圖リ給フ
皇祖　皇宗暨　列聖ノ神祐
陛下ノ聖躬ニ在リ皇業愈〻昌ニシテ德澤益〻浹ク頌音四
海ニ洋溢セム臣等夙夜勤勉力ヲ戮セ心ヲ同クシ忠藎
ノ節ヲ勵マシ報效ノ誠ヲ竭シ以テ　聖旨ニ答ヘ奉ラ
ムコトヲ誓フ臣等幸ニ盛儀ニ班列シ瑞雲ノ鳳殿ヲ繞
リ仁風ノ錦幢ヲ颺スヲ望ミテ聳慶躍悅ノ至ニ任フル
無シ臣重信帝國臣民ニ代リ恭シク大禮ヲ賀シ千萬歲
ノ壽ヲ上ツル臣重信誠懽誠喜頓首頓首謹ミテ言ス
大正四年十一月十日

内閣總理大臣正二位勳一等伯爵　臣　大隈重信

大上有立德
左傳に出づ。穆叔の語。

三　人生の快事その一　三宅雪嶺

「大上有立德、其次有立功、其次有立言、雖久不廢、此之謂不朽。」と曰へるは、穆叔以前より行はれたりし格言なるべく、穆叔以

Homer
(Homeros)

後數千年を經て變ぜず。註に立德は黃帝・堯・舜、立功は禹・稷、立言は史佚・周任・臧文仲とあり。他の例を擧ぐれば、孔子・釋迦・耶蘇の如きを立德とし、該撒(シーザー)・奈破崙の如きを立功とし、ホ*ーマー以下の文學者を立言とすべし。この三不朽を智仁勇の達德に配當せば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、主要なるものを擧ぐれば各〻特色あり。中に史的の意義ありて、現代に認むるを難んずるは立德なり。現に立功家及び立言家の少からざるに、稱して立德家とすべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば、現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。

Voltaire

魏の文帝
魏の曹丕。

今は立德の形跡あるものも、立功と立言との孰れかに屬すべきが如し。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絕頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるかに考へらるれど、箒木の如く之を求めて遂に見失ふに終らん。現代の人の志す所は立功ならざれば立言なり。

魏*の文帝曰く、「年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。」と。是、文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所にして、「筆は劍より强し。」といふも、其の旨相近し。ヴォルテール曰く、「功名心ある者にして悉く目的を達し得べくば、悉く文字の人となるべし。」と。ホーマーは傳明かならざれど、傳說に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且

語れる者なりといふ。明を失ひしが上、門附の如く絃歌して錢を乞ひしものならば、苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば、死すとも可なりと考ふるもの常にこれあり。凡そ苦心慘澹の甚だしきこと、詩人の句を撰するが如きは少し。司馬相如の子虛賦、左思の三都賦、辭を練るに全力を用ひき。杜少陵が「爲人性癖耽佳句、句不驚人死不休」といへる、眞に實狀なり。幾多詩人中には、强ち人を驚かさんとせず、或は之を喜ばしめんとし、或は之を悲しましめんとし、或は之を別乾坤に導かんとするもあるべけれど、要するに皆多少目的を達する所に愉快を感じ、洛陽の紙價を貴くせる時、誠に大勝利を得たる如く

司馬相如　漢の詩人。五百年代の人。
左思　晉の詩人。
杜少陵　唐の詩人。名は甫。

悅びたるならん。己の以て絶佳とする所、人全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、內に入りて米鹽に窮する時、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰めたるべし。又實に當世に屈して後世に伸ぶるものあり。「人間知己少、破硯是良朋」といへるは、知己の少くして愈〻得意を感ぜるなり。賈誼・蘇軾の策論は正しく立言なり。世に論文と稱するは皆然り。論文といふも全篇悉く議論より成るとは限らず、或は議論を敍事の間に挿むあり、或は議論を挿まずして自然に主張たるあり。マコーレーの英國史は歷史にして自由主義を鼓吹し、カーライルのフレデリック傳は傳記にし

人間知己少　村上佛山の句。
賈誼　漢の文人。
蘇軾　宋の文人。
Macaulay
Carlyle
Frederick

て人格の堅實を奬勵せるなり。東洋の史傳は皆多少主張あり。爲に史實を枉ぐとの非難あれど、史實を枉げずして主張するを得ずとは謂ふべからず。

Michael angelo

言は意を盡さず。易經に、「書不レ盡レ言、言不レ盡レ意。」

四　人生の快事その二

形を異にして實を同じくするは、詩と藝術、文と科學なり。「言*は意を盡さず、文は言を盡さず」といへり。立言は卽ち立意にして、凡そ目的を達し得るものは、宜しく立言と見るべし。藝術家の製作に從事するは樂しきか、樂しからざるか、樂しくとも、世間の想像する所とは同じからじ。ミケランゼロ*の工場に入りしものは彼の努力に驚かざるなし。夜

Sistin chakel
Darwin
Shakespeare
Archimedes

更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を翳し、著手しつゝある製作に從事す。シスト*禮拜堂の天井畫を完成せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲に頸が曲らざりきといふ。上下に重んぜられて、生活も豐かなりしが、肉體の滿足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘澹の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讃歎せず。世間に美として讃歎する所も嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダ*ーウィンは自ら歎じて曰ふ「吾はシェ*ークスピヤを讀みて少しも興味を感ぜず」と。初より感ぜざりしに非ず、生物の研究を專らにし、遂に之を感ぜざるに至りしなり。アル*キミデスは兵

卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて、一意研究しつゝあり。兵卒を顧みて曰ふ、「暫く待て。問題を決せん。」と。言ひ終らずして殺さる。傳說にてはあれど、科學家の研究に專らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは、必ず別に樂しむ所あり。常人の樂しむ所と異なり。稱して樂しむといふべからずんば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

「英雄何必讀書史。」とは單に東洋のみならず、何處にも言ひふるしたることなり。泰平無事の日には斯く考ふる者多からざれど、警報傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に際會すといふを事實にせんと欲し、曰く、「大丈夫當に屍を馬

英雄何必云々　清の鄭板橋の句。

大丈夫云々　後漢の馬援の語

革に裹むべし。」曰く、「男兒當に天下に横行して富貴を取るべし。」と。出でては將、入りては相、若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歷山（アレキサンデル）、近きは奈破崙、人生れて彼の如くなるを得ば、萬死して憾なしとす。其の何が望ましきかと問へば、言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきに在れど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歷山は天眞爛漫、直情徑行、一切の僞善を憎み、波斯に遠征して波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道といふを敢てせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。

男兒當に云々　事文類聚別集に出づ。

彼の愉快を感ずるは富貴に在らず、無上の權を振ふに在り。歳三十にて歿し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、卽ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感ぜるは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸し得る處に滿足を感じたるならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て滿足せしもの、その羅馬を模範とし、世界地圖を改め、永遠の平和を計れる實に時代を超越せる觀あり。衣囊にホーマーを置き、劍を以て世界を切り從へんとの抱負を遂行せんとし、胸中の悶々たる時には涌くが如き智略とアルプを拔く勇氣とに快感を覺えたるべく、遠洋の飛島に流さるゝや、居常鬱々たりとはいへ、自ら古來の英雄に比較して滿足を感ぜるものゝ如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に、何の邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄の古代に限らず、後世に古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

五　人生の快事その三

青年の功名に急なるものは、政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるものゝ多きは、官吏となり、銀行會社員となる外、比較的功名心を滿すべき

William Pitt　Cavour

門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置あるが故に麓に集る者甚だ多し。されど高き位置に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは少し。後世に欽慕せらるゝ者は特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウイリアム、ピットは獨身にして、國家を以て妻とすと稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くなりき。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任ぜしカヴール*は、同じく國家を以て妻とすと稱せり。大いに富み大いに驕らずんば、高き位置を占むる効なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むる徒は、政界に飛ぶとも僅かに蝙蝠の飛ぶが如し。大政治家の

Marcus Aurelius　Pallissy

愉快は、我が施設の効顯れ、幾分にても國家社會の進善せんとするを見るに在り。古代には諸葛孔明の如き、マルクス*、アウレリウスの如き傑出せるものありき。

器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業・工業・農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家・工業家・農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず、富みて新工夫を運らしゝあり、貧困を忍びて成し遂げし事業の價値の少きもあれど、新發明・新工夫の記錄は、半面より觀て貧困との鬪爭なり。パリッシ*の如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、勇者は世に益すること多きにもせ

よ、後人を感奮し、努力せしむるは、一切を放擲して事に專らなるものゝ傳記にして、事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。「彼も人、我も人、豈彼の如くなるを得ざらんや」と後人の發憤するは、富貴にして歡樂に耽る所に在らず、己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとする所に在り。爲に人は往々立徳の事に考へ及ぶ。

帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の寺に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、斯く帝王を跪かしむる立徳家なりとすべく、隨つて志の大なる者の、以て人生の最大快事とするは之に彷彿たるに在り。されど、彼等がたとひ能

く立徳家の如くなるを得たりとて、果して、愉快なるを得べきか　又名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子・釋迦・耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子・釋迦・耶蘇の如き不遇、又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もと立徳は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を以て衆徳を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充つるのみ。人生最上の目的は立徳なりと雖も、立徳家たらんには、如何にせば可なるかといへば、容易に解答を與へ難し。分け登る麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。立徳は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功に在り。立言に種類あり、詩あり、文あ

り、藝術あり、科學あり。　立功に種類あり、軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。　之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸さば、幾許か立德たるを得ん。

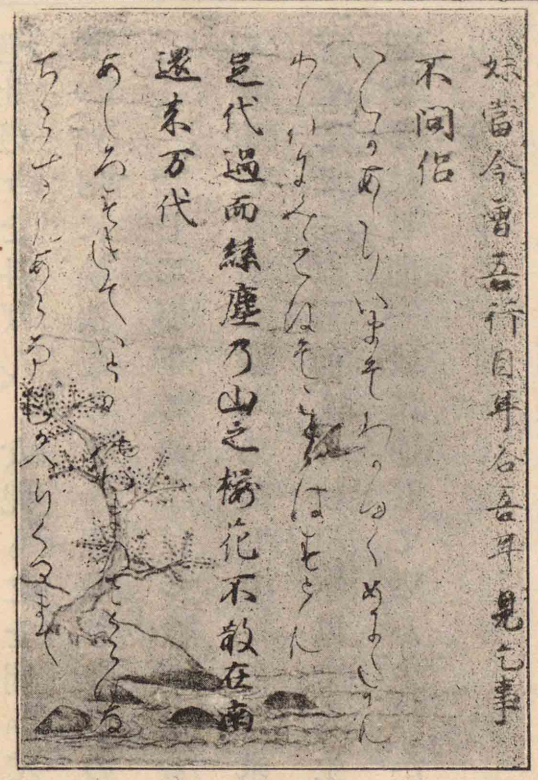
高山の絶頂は寒冷にして風强く、久しく居るに堪へず。　而も健脚なる者は、麓にありて百花の咲き亂るゝを觀て滿足せず、必ず蒼空を凌がんことを期す。　歡樂は麓にあり、安樂は麓にあり、日常の愉快は悉く麓にあり。　されど他人より身體の强健にして女兒の樂しむ所の外に出でざるは、聊か物足らず覺ゆべく、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快を恣にせんとす。　或はアルプを低しとし、全く人跡絶えたるヒマラヤ山に登らんと企つ。　而して若し幸にその上に立たんか、千古の氷雪萬里に亙るを見て、壯絶・快絶・壯絶々を叫ばん。　女兒も之を聞いて地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己の企て及ばざるを歎ぜん。　蓋し形而下の快事は多數の求むる所にして、形而上の快事は少數の求むる所なり。　而も求むると求めざるとの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは、世間一般に通じて動かすべからざる所の事實なり。（日本及日本人）

六　萬葉集の歌

柿本人丸
人丸は普通に人麿と稱す。

吉野宮に幸ませる時　柿本人丸

安見しゝ吾が大君　神ながら神さびせすと
吉野川瀧つ河内に
高殿を高知り
座して
上り立ち國見をすれば
たゝなはる青垣山の
山神の奉る御調と
春べは花かざし持ち
秋立てば紅葉かざせり
大御食に仕へまつると
下つ瀬に小網さし渡す
神の御代かも



萬葉集古寫本

反歌

山川もよりて仕ふる神ながら
たぎつ河内に船出せすかも

不盡山を望みて　山部赤人

天地の分れし時ゆ
神さびて高く貴き
駿河なる富士の高嶺を
天の原ふりさけ見れば
渡る日の影も隠ろひ
照る月の光も見えず
ゆふ川の神も
上つ瀬に鵜川を立て
山川も依りて仕ふる

白雲もい行きはゞかり　時じくぞ雪は降りける
語り繼ぎ言繼ぎ行かむ　富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ
富士の高嶺に雪は降りける

山上憶良

子等を忍ぶ歌

瓜食めば子ども思ほゆ　栗食めばましてしのばゆ
いづくより來りしものぞ　眼交(マナカヒ)にもとなかゝりて
安寢しなさぬ

反歌

白金も黃金も玉も何せむに
まされる寶子にしかめやも

勇士の名を振ふを慕ふ歌　大伴家持

ちゝのみの父の命　はゝそばの母の命
おほろかに心つくして　思ふらむ其の子なれやも
丈夫や空しくあるべき　梓弓末ふり起し
投矢もち千尋射わたし　劍太刀腰に取り佩き
足引の八峰(ヤツヲ)踏み越え　差任(サシマ)る情(コヽロ)さやらず
後の代の語り繼ぐべく　名を立つべしも

反歌

丈夫は名をし立つべし後の世に
聞き繼ぐ人も語り繼ぐがね

落花の雪　またや見む交野のみのの櫻狩花の雪ちる春の曙　（藤原俊成）

紅葉の錦　朝まだき嵐の山の寒ければ、紅葉の錦きぬ人ぞなき　（藤原公任）

うねの野　近江より朝たちくればうねの野に鶴ぞなくなる明けぬ此の夜は。　（古今集）

七　落花の雪

落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも旅寢となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き、年久しくも住馴れし九重の帝都をば今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ心の中ぞ哀なる。

憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱。　沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く。　身をうき船の浮き沈み。　駒もとゞろと踏みならす勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみぢや、世をうねの野に鳴く鶴

時雨も　白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。　（紀貫之）

なるみがた　小夜千鳥聲こそ近くなるみがた、かたむく月にしほや滿つらむ。　（新古集）

も子を思ふかとあはれなり。　時雨も痛くもり山の木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず。　物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に、駒を留めて顧みる故郷を雲や隔つらむ。　番場・醒ヶ井・柏原、不破の關屋は荒れ果てゝ、猶もるものは秋の雨のいつかわがみのをはりなる熱田の八劍伏し拜み、汐干に今やなるみがた。　傾く月に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰か哀とゆふぐれの晩鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ。

旅館の燈幽かにして鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、さやの中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも、美ましくぞ思はれける。　隙行く駒の足早み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて輿を庭前に舁き止む。　轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戰の時院宣書きたりし咎に因りて、宗行卿關東へ召下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水
今東海道菊川

汲下流而延齡
宿西岸而終命

命なりけり　年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山（山家集）

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、哀やいとゞ優りけむ、一首の歌を詠みて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の
おなじながれに身をやしづめむ

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に宇都の山邊を越え行けば、蔦葛いと茂りて道もなし。　昔業平の中將の住む所を覓むとて、東の方に下るとて、「夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られた

夢にも云々　駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり（伊勢物語）

り。清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向はいづこ、みほが崎。興津・蒲原打過ぎて富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き船浮きておりたつ田子のみづからも、浮世を遠る車返。竹の下道行惱む、足柄山の峠より、大磯・小磯見下して袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數積れば七月廿六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。（太平記）

上なきおもひ　富士のねの煙もたほぞ立ちのぼる。上なきものはおもひたりけり。（藤原家隆）

八　近世の儒學

徳川家康が文教奬勵の氣運に乘じ、朱子學を標榜して其の先驅となりし者は藤原惺窩なり。惺窩は其の功績より言へば儒學中興の名譽に値し、又實に戰國・霸府兩時代の聯絡を通ぜし者なり。其の門下第一の林羅山は、强記博識にして霸府の叔孫通と稱せられ、長く林家の學統を傳へしと雖も、未だ多く關左の文運を振興する能はずして止みぬ。松永昌三亦惺窩の學を傳へ、其の弟子木下順庵に至りて門戸頗る大に、後、東に下るに及び、此の地の儒學爲に盛なるを得たり。之に從游せしもの新井白石・室鳩巣・雨森芳洲・祇

藤原惺窩　元和五年（一六一九）歿す。

林羅山　明暦三年（一六五七）歿す。

叔孫通　漢の博士、高祖に說きて朝儀を起さしむ。

松永昌三　明暦元年（一六五五）歿す。

木下順庵　元祿十一年（一六九八）歿す。

新井白石　享保十年（一七二五）歿す。

室鳩巣　享保十九年(一七三四)歿す。
雨森芳洲　寶暦五年(一七五五)歿す。
祇園南海　寶暦元年(一七五一)歿す。
山崎闇齋　天和二年(一六八二)歿す。
淺見絅齋　正德元年(一七一一)歿す。
三宅尙齋　元文六年(一七四一)歿す。
佐藤直方　享保四年(一七一九)歿す。
立原翠軒　文政六年(一八二三)歿す。
藤田幽谷　文政九年(一八二六)歿す。
青山拙齋　天保十四年(一八四三)歿す。
藤田東湖　安政二年(一八五五)歿す。
寛政の三博士　柴野栗山・尾藤二洲・古賀精里。

園南海等、皆一時の選なりき。其の學風は博通不偏を特色とし、幾もなくして分裂の傾向を生じ、一大勢力を凝聚するに及ばざりしかど、極めて多面的に開展し、其の貢獻せし所實に多しとす。山崎闇齋は、南學を傳へ、後、一變して垂加神道を唱へ、大いに國民的氣槩を養ふに努めしが、その末流れて水戸學となり、王政復古の一原動力となれり。闇齋の門下に淺見絅齋・三宅尙齋・佐藤直方等あり、之を崎門の三傑といふ。又水戸學を樹立せしむるに與つて力ありしものを立原翠軒とす。藤田幽谷・青山拙齋の如き皆その門下に出づ。東湖は卽ち幽谷の子なり。

林羅山

元明以後の支那に於けると同じく、霸府が正學として表章せしものは朱學にして、上は昌平黌より下は諸侯の藩學、民間の私塾に至るまで、到る處之を敎習せしかば、學者の多き殆ど指を屈すべからず。されど朱學は其の體系既に完全に近く、他の思想と交渉せざる限りは革造の餘地を存すること少かりしを以て、學說の進步特に言ふべきものなく、其の活動的なりしは、主として當初に限られたり。後寛政の三博士大いに學政を革め、再び斯學を標章せしと雖も、其の本質に於ては毫も變化を及さず、其の態度其の勢力倶に依

陸王學
陸象山と王陽明との學說。

中江藤樹
慶安元年（一六四八）歿す。

熊澤蕃山
元祿四年（一六九一）歿す。

大鹽中齋
天保八年（一八三七）歿す。

然として舊に仍れりき。しかも朱學が、諸種學派の先驅として學界に盡しゝ功は之を沒すべからざるなり。

朱學と反對の地位に立てる陸王學の五山に於けるや、亦久しからずとせず。而して惺窩も亦公平の見を以て、敢て象山を棄てざりき。こゝに陽明歿後八十年、我が慶長十三年近江聖人の稱ある中江藤樹は生れたり。藤樹初め程朱の書を讀みしが、漸く疑ふ所あり、後陽明の書を得、之を研鑽して深く崇信し、始めて其の學を江西に唱へぬ。尋いでまた熊澤蕃山・大鹽中齋等あり。清朝に於て殆ど其の跡を留めざりし姚江の學は、本邦に入りて其の流長く絕えず、省察事功の兩者に於て、往々奇偉の士を出したるを見る。

山鹿素行
貞享二年（一六八五）歿す。

伊藤仁齋
寶永二年（一七〇五）歿す。

荻生徂徠
享保一年（一七一六）歿す。

清朝考證學の勃興と同時に、我が邦に於ても古學派の起るあり。其の徒は宋明の性理殊に程朱を排斥し、漢唐の註疏に據りて、純粹なる原始的意義を闡明せんと企てし者なり。

伊藤仁齋

山鹿素行・伊藤仁齋・物徂徠の如き卽ち是なり。而して此等諸人才力の非凡なる、講習より一歩を進めて、よく斬新奇警の說を出せり。素行はゆくりなくも其の學を以て奇禍を買ひしが、儒敎の粹たる道義的精神を以て我が國體に調和し、武士的敎訓を後代に殘せり。古學を立せる仁齋

と古文辭學を唱へたる徂徠とは、鮮明なる旗幟を以て東西に對峙し、其の學界に及せる影響甚だ大なり。仁齋は理氣に就いて辨じ、全く哲學者的なれども、徂徠は荀卿・韓非を參酌して國家の治を論じ、正しく政論家なり。仁齋の子には東涯あり、徂徠の門には太宰春臺あり。若し夫れ眞正の考證に至りては、安永・天明の間吉田篁墩あり、しかも必然の勢、次に述ぶる折衷學と緊密の關係あるを以て、その徒中の人往々にして、之を兼ねたり。

荻生徂徠

東涯　元文元年（一三九六）歿す。
太宰春臺　延享四年（一四〇七）歿す。
吉田篁墩　寛政十年（一四五八）歿す。

折衷學は木門の榊原篁洲が新古兩註を竝用せしに始り、物伊二家の末流、各〻黨を樹てし時に於て確立し、公平の態度を標して諸家の所長を折衷し、寶曆・天明の間最も其の盛を極めぬ。片山兼山・井上金峨の如き卽ち此に屬す。

以上四派の儒學の外、儒教に加ふるに我が國特有の神道及び佛・道二教を以てし、或は其の二、或は其の三、或は其の四を兼ねて調和を圖れるあり。又、平民教派ともいふべき心學あり。もと陽明學の餘派と稱すれども、巧に神・儒・佛の教を取り交へ、通俗易解を主として市井の間に講說し、能く顯著なる效果を收めたり。石田梅巖・手島堵庵・中澤道二・柴田鳩翁の如きは、卽ち心學者の主なる者なり。又、二宮尊德の唱

榊原篁洲　寶永三年（一三六六）歿す。
片山兼山　天明二年（一四四三）歿す。
井上金峨　天明四年（一四四四）歿す。
石田梅巖　延享元年（一四〇四）歿す。
手島堵庵　天明六年（一四四六）歿す。

中澤道二　享和三年(一八〇三)歿す。
柴田鳩翁　天保十年(一八三九)歿す。
二宮尊德　安政三年(一八五六)歿す。
墨子　墨翟。
管子　管仲。

へたる報德教あり、其の說、經濟道德の關係を要とし、其の天の法則を認識せるは墨子*に近く其の利を重んずるは管子*に類す。彼や固より不世出の才、期せずして自ら此に至れるなり。（日本儒學史に據る）

九　人生と四季

坪內雄藏

夏は大なり。陽威の徹する所、萬物悉く暢ぶ。丁壯は人生の夏なり、豪氣斗牛を呑む。大なる乾坤蝸廬よりも狹し。而して彼等は妄想の邊なきに耽りて、現實界の有限なるを知らず。此の故に挺然勇往し、悍然敢てなす。又この故に相激し相薄り、霹靂また列缺、天を撼かし地を震ふ。かの六七月の驟雨、何ぞそれ急激なる。猛然屋を發き、俄然樹を飛ばし、海を捲き山を崩す。豈是壯年客氣の徒が、破壞革新をことゝする隱喩にあらずや。若しくは盛夏陶々、毒炎燬するが如く、天色紅銅の如く、風死して石煮え、牛あふのき犬あへぐ。終日昏々、居るに懶く往くに懶く、生きたれども死せるが如く、有れども無きが如し。この陽威に撲たれて惘々然たる境、吾人又之を迷惑耽溺の青年に見る。

秋に至りては然らず。秋の狀たる、その色慘澹として、煙霏び雲歛まる。その容清明にして、天高く日晶かなり。その氣慓烈として人の肌骨を砭す。その意蕭條として、山川寂寥たり。寂寥と慓烈とは、いまだ秋意をつくしたる者にあ

らず、蓋しこの物足りて綽々たる容こそ、別に幾分の秋意の宿る所なれ。　秋は凄慘をのみその意となせるにあらず。それ春は外あまりに派手やかにして内浮きたり。　秋は外靜にして、内しまれり。　春は盎然として長閑なれども、内に堅實なる所なし。　秋は凄然として痛ましげなれども、内和平にして融然たり。　春の詠めはめざましけれども、その盛り何ぞさしも短うしてはかなきや。　梅櫻相追うて散りつくし、桃李相ついで代謝す。　沙羅雙樹の花の色、祇園精舎の鐘の聲、無常は雙方に見ゆれども、秋に悲觀するものは多く、春に靜なる心は稀なり。　陽、陰に克てばなるべし。

沙羅雙樹云々　平家物語卷頭の語。

春の時にありては、山笑ひ鳥戯れ、天地讙然として、隨處に樂

土あり。　正に是れ「死にさうな人ひとりなし花の山。」天地相和ぎ、男女相喜ぶ。　私欲滔々として、是非空しからんとす。「春の日や達摩大師も尻もだへ。」

これ陽氣覆載を驅る時なり。　之を青年が感情的生涯に比す、豈近からずや。　要するに春は感動の期、その相は美、情の天地なり。　夏は活動の期、その相は壯、意氣の天地なり。　而して秋は瞑想の期、その相は肅、理性の天地なり。　青春はたとへば抒情詩人の生活、朱夏はかの世間の英雄、而して白藏は哲學者の生活に喩ふべし。　知らず玄冬は如何なる生活にか比すべき。

白藏　秋をいふ。爾雅釋天に「秋爲二白藏一」

人間頽然として老來れば、枯槁骨立して一見慘然たり。　而

して戚々然として死に至る、頗る晩冬の落然たるに似たり。又見よ、寒景の閲然として索寞たるを。何ぞ人の羸憊して、血氣日に衰へたるに似たる。然れどもかくの如きは、晩冬及び老境の容貌のみ。かるが故に冬を悲觀し、かるが故に老境に絶望するは、いまだ大法を悟らざるものか。

それ陰陽消長の無始にして無終なるは、なほ生活の首尾なきが如し。冬來りて陰氣極まるや、一陽來復して、年のうちに踏込む春の日の日脚長閑に、軒端の梅ふふみそめて、一輪づゝのあたゝかさに、又青帝の駕の近きを知る。老は一面より見れば、壞空の時、他の面より見れば、新生生の起端、即ち人間一生の大事、圓滿成就して再び大元に歸する時、是豈無

一輪づゝの梅一輪一輪づつのあたゝかさ（嵐雪）

上光榮の期にあらずや。

彼の君子人の老後を見るに、煩惱自ら消盡して、身神塵垢の表に淨く、外樂を非とし、世喧を忘れ、澹然として慮なく、泊乎として爲す無く、内に自持する所ありて、行住晏如たり。是決して情感の春、氣鋭の夏、思索の秋に於いて見るべからざる所。老いて益〻神健に、智德よく和合したる、人生何れの時か此の時よりいみじき。誰かいふ「紅葉は二月の花よりも紅にして、秋野は花園の浮靡に勝る」と。北風一たび渡りて萬象蕩然、大雪頻りに降りて山河銀と化する所、千里一色、天地一味。古今覆載、何ものか之よりも崇嚴、之よりも闊大なる。全壞空は崇の極なり。冬は大涅槃の面影なり。

紅葉は云々　紅葉紅於二月花―は杜攀川の詩句。

あはれ人生は四季に似たるかな。誰かこの四の一二を取りて、他の二三を棄てんとはするぞ。四季遍く一巡して陰陽和諧し、生住壞空して、人竟に正覺す。春に春の能事あり、夏に夏の能事あり。秋冬又各その本領を具ふ。陰陽は往來して、須臾だに止まらず。人ひとり退轉す。これ人生の秋冬が、屢〻索然たる所以にあらずや。四季悉く樂時、老少何れも樂境。予は之を造化の隱喩とす。（文學其の折々）

一〇　月は世々の形見

室鳩巣

今年もはや半ば過ぎぬれば、いつしか秋の氣色たちて、荻吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば此のほどの老のねざめも覺束なし。いざ尋ね問はむ」とて、或夕暮に例の人々打連れて來りしが、「又も參らむ」とて歸らむとせしを、翁止めて「今宵は月もよし。薄酒進め奉らむ。しひて止り給へ」といへば、「翁の心を爭で背くべき。さあらば」とて各〻座をしめて淸談の露やう〳〵繁き程に、家人軈て心得て取敢へぬ迄にあるじまうけし、肴取添へて盃出しけり。諸客皆醉うて興に入るとぞ見えし。其の中に一人盃を停めて「靑天有月來幾時、我今停盃一問之」と、李白が詩を高らかに打吟じけるを、又二人脇よりつけて「人攀明月不可得、月行却與人相隨」と歌ふ。又外の人々迭に唱和して、其の次を「皎如飛鏡臨丹闕、綠煙滅盡淸輝發」と歌ふ。又其の次を「但見宵從

海上來、寧知曉向雲間沒、白兎搗藥秋復春、姮娥孤棲與誰鄰。」と歌ふ。其の次よりは翁も助言して、「今人不見古時月、今月曾經照古人、古人今人如流水、共看明月皆如此、惟願當歌對酒時、月光長照金樽裏。」とうたひをさめけり。其の後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。

さて翁いふやう、『大かたは月をもめでじ』とはよみたれども、老の心も月みるにこそ慰み侍る。されど其につきて百載無窮の感も起りぬれば、むべ月を『人の老となる』ともいふべかめり。但し月を見るに色々あり。今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五日の宴に、獨り隅に向ひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、『月は徑

大方は云々　大方は月をもめでじ是ぞ此のつもれば人の老となるもの。（古今和歌集業平朝臣）

幾尺かあるべき。各、考へて見給へ。』といふ。又同じやうの人かたへより『彼は物の切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらむ。』とて、たがひに僉議しけるを、きく人々皆舌を喰ひけり。翁も幼心にをかしかりし。今おもへば世俗月を賞して、光の明きを誇り、影の清きにめでゝ、良夜とて唯打寄り、物喰ひ酒飲みなどして歌ひ罵るを樂とするは、かの寸尺を語るに等しかりぬべし。又騷人・墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其も唯景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。

翁が千載無窮の感と申すは、我が儕古人を慕ひて、其の書を

よみ、其の心を知りつゝ常に世を隔てたる恨あるに、月許りこそ世々の人を照し來て今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、宛ら古人の面影も映る樣に覺え、月は物言はねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてゝ、一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時。』といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。昔より李・杜とて杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。しかれども李白の詩も『古今如流水』を感ずる迄にて、後代を待つの心は見えず。翁、昔楚辭*をよみて『往者余弗及、來者吾不聞。』といふに至りて、

楚辭　屈原の著したるもの。

屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなむ覺えき。此の二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語らむと思へど、其の世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめと思へど、其の人をきかねば、誰とかしらむとぞ。是なむ屈子に限らず、古今心ある際は、大方此の恨なきにしもあらず。翁も此の心にして月を見るにや、いとゞ感深く覺ゆるなり。元より今は末の世の昔なればいづれの世にか、又我が如く月に對して、今を忍ぶ人もやあらむ。月はさこそ其の世をも照すらめ。若しあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をものこさましとお

もひ侍るそのこゝろを、

月みれば末の代までも忍ばれて
見ぬいにしへのいとゞゆかしき

こゝをもて翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず。」（駿臺雜話）

一一　月花のことわり

村田春海

わかさくらの宮　履仲天皇の御代。

朝倉の宮　雄略天皇の御代。

花をめづらしみ月をあはれむならはしなむ、流れての世はさらなる、其のみなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞ起りにける。花に心を慰めませしは、わかさくらの宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原・奈良の御世にいたりては、歌人おほくいで來て、かたみにみやびをかはし、こゝろ〳〵に思ひをのぶる事、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此のすさみいよ〳〵盛になりもてゆきて、あるは物おもひなき春を花によろこび、加る老を月になげき、あるは賢きも、おろかなるも、たよりなき所にはなをたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、又しものしもなる薪木こる山がつ、いぶせきふせやのしづのめまでも月と花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるはかけまくもかしこき大御遊のきはことなるが中にも、月と花と

藤原　持統・文武二帝の御代。

奈良の御代　元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱德・光仁七代の御代。

の爲には時にのぞみて殊更にうたげの筵を設け給ふ事おきてたがはず。のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまゝなる代々のあとを見るに、いにしへも今も高きもみじかきも、月と花とをうむかしみおもへること等しくて、いづれをあまれりとし、いづれをたらずとして一かたに心よせたる人誰かはあらむ。しかるを今にありて其のよしあしをことわりいはむは、人わらへにもなりぬべし。しかはあれどこれをことわるにゆゑあり。その劣り優りはもとよりかれにはあらざめれど、おのがじゝ打見る人の身にたぐへおもはむには、其のよるかたいかでかなからむ。抑花は春にありて賑しきにより、月は秋にありて

悲しみをぞ起すなる。今このくちおきなが心にとりていはば、身すでに老いたれば、つぼめる花のさかりまちいでむたのしみもなく、品いやしければ花々しき世をへて時にかをらむ願もかけず。ただ鏡にうちむかふをりしも、頭の霜を見ては月の影かと驚き、かたぶく齡をおもひては、入りかたの月ぞ身によそへつべき。かゝれば花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり。おほよそ人の爲にはいかでかまねびもいでむ。（琴後集）

一二　村時雨

坂本には行幸をまち聞え給ひけるに、引きたがへ南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなばあしかりぬべし。又とまれかくまれ、まことのおはしまし所をさうなく武家へ知らせじのたばかりにやありけむ、花山院の大納言師賢を山へつかはして、忍びて御門のおはしますよしにもてないて、かの兩法親王事行ひ給ひつつ、六波羅のつはものどものかこみを防がせ給ふ。

兩法親王　尊澄法親王と尊雲法親王。

六波羅より、御門こゝにおはしますと心えて、武士どもおほくまゐりかこむ。山法師もたゝかひなどして、海東とかやいふつはもの討たれにけり。事のはじめに、東うせぬるめでたしなどぞいふめる。かゝれども御門笠置におはしますよし、程なくきこえぬれば、謀られ奉りにけるとて、山の衆徒もせう〳〵心がはりしぬ。宮々も逃げいでたまひて、笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へまぎれおはすとて、夜ぶかく志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月くまなくすみわたりて、寄せかへる浪の音もさびしきに、松ふく風の身にしみたるさへ、とりあつめ心ぼそし。

海東　敵の大將海東左近大夫將監。

思ふ事なくてぞ見ましほの〳〵と
ありあけの月の志賀の浦浪

その後辛うじてぞ笠置へはたどり參られける。かやうの事ども、例のはや馬にて、あづまへ告げやりぬ。笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより、兵ども參りつどふ

中に、事のはじめより頼み思されたりし、楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内國におのがたちのあたりを、いかめしくしたゝめて、このおはします所若し危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意しけり。東のえびすどもゝ、やう〳〵攻め上る由聞ゆ。もとより京にある武士どもゝ、我先にときほひまゐる。木丸殿には、さこそいへ、むね〳〵しきものなし。いかになりゆくべきにかと、いと物心細く思し亂る。我が御心もての御事なれば、かこつ方なけれど、故郷の空もあはれに思しいでらる。秋も深くなりゆく儘に、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐の音づるゝも、仇のきほふかと肝をけす御すまひ、いつしか御身をかへたる心ちし給ふも味氣なし。

うかりける身を秋風にさそはれて
思はぬ山のもみぢをぞ見る

既にあづまの武士ども、雲霞のいきほひをたなびかし、上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじうおぼしさわぐ。もとよりいとけはしき山のつゞらをりを、えもいはず木戸・さかも木・石弓などいふ事どもしたゝめらる。さりともたやすくは破れじと、頼ませ給へるに、後の山より御かたきどもくづれ參りて、木戸ども焼きはらひ、おはしますあたり近く既に煙もかゝりければ、今はいかゞせむにて、あやしき御姿にやつれて、たどり出でさせ給ふ。座*主の法親王御手をひき奉り

座主の法親王　尊澄法親王。

給へるも、いとはかなげなる御ありさまなり。

*中務の御子、*大塔の宮などは、かねてより、こゝを出でさせ給ひて、楠木がたちにおはしましけり。行幸もそなたざまにやと思し心ざして、藤房・具行兩中納言、師賢の大納言入道手を取りかはして、ほのほの中を免れいづる程の心ちども夢とだに思ひもわかず、いとあさまし。少しのびさせ給ひてぞ御馬たづね出でゝ、君ばかりたてまつりぬれど、ならはぬ山路に御心ちも損はれて、誠にあやふく見えさせ給へば、たかまの山といふわたりにしばし御心ちをためらふ所に、山城國の民にて、*深須の五郎入道とかいふもの、參りかゝりて案内聞えたるしも、いとめざましう口をし。上達部思ひや

中務の御子　尊良親王。
大塔の宮　尊雲法親王。

るかたなくて、只目を見かはして、いかさまにせむとあきれたるに、あづまより上れる大將軍にて、陸奥國の守貞直といふもの、大勢にて參れり。今はたゞともかくものたまはすべきやうなければ、遂にかひなくて、敵のために御身をまかせぬるさまなり。

やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらでひかされおはしますに、心うしといふもなのめなり。具行・藤房・忠顯少將など、やがておのが手のものどもに隨へさせつ。大納言入道御馬のしりに走りおくれて、こゝかしこの岩かげ木のもとに休みつゝ、とかくためらふ程に、それも見つけられてとられぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事

のこし六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに、涙もよほしがほなり。平等院の紅葉御覽じやらるゝも、かゝらぬ行幸ならばとあへなし。後冷泉院かとよ、こゝに行幸し給ひて、三四日おはしましけるその世の人の心ち、上下何事かはとうらやましくあはれにおぼさる。

十月三日都へ入らせ給ふも、思ひしにかはりていとすさまじげなる武士ども、衛府のすけの心ちして、御輿近くうちかこみたり。鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより兩院*・春宮*おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどし

兩院　後伏見・花園の二上皇。
春宮　量仁親王。

ておはしまさするも、いとほしうかたじけなし。間近き程によろづきこしめし、御覽じふるゝことゞにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらむ。口をしうおぼしみだる。ならはぬ御やどりに、時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬいたやの軒のむら時雨
音をきくにもぬるゝ袖かな

中務の宮は、正成がもとにおはしましつれど、御門のかくならせ給ひぬれば、今はかひなしとて、それも都へ入らせ給ひて、佐々木判官時信といふものゝ家にわたり給ひぬ。つれづれと物思しみだるゝより外の事なし。

世のうさを空にもしるや神無月

ことわりすぎてふる時雨かな　（增鏡）

一三　安宅その一

ワキ「かやうに候者は、加賀の國富樫の何某にて候。さても頼朝・義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作山伏となつて、奥へ御下向の由頼朝聞しめし及ばれ、國々に新關をたてゝ、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間此處をば某承つて山伏を留め申候。今日も固く申しつけばやと存候。いかに誰かある。狂言「御前に候。ワキ「今日も山伏の御通りあらば此方へ申候へ。狂言「畏つて候。シテ山伏次第「旅のころもは篠懸の、旅の衣は篠懸のつゆけき袖やしをるら

これやこの云々
これや此の行くもかへるもわかれては、知るるも知らぬも逢坂の關。（後撰集、蟬丸）。

山隱す云々
山隱す春の霞ぞ恨めしき、いづれ都の境なるらむ。（古今集、おと）

海津の浦
近江國高島郡に在り。

淺茅色づく云々
矢田の野に淺茅色つく有乳山、みねの淡雪さむくぞあるらし。（新古今集、人丸）

む。サシ「鴻門楯破れ都の外の旅衣、日もはるゞの越路の末、思ひやるこそ遙かなれ。シテ「扨御供の人々には、同山「伊勢の三郎・駿河の二郎、片岡・增尾・常陸房。シテ「辨慶は先達の姿となりて。同山「主從以上十二人。未だ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、けふ分けそめて何時迄の、限りもいさや、白雪の、越路の春に急ぐなり。上歌「時しも頃は二月の、時しも頃は二月の、二月の十日の夜、月の都を立出でて、これやこの、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも、逢阪の、山隱す、霞ぞ春は、怨めしき霞ぞ春は怨めしき。下歌「浪路遙かに行く舟の、浪路遙かに行く舟の、海津の浦に著きにけり。東雲早く明け行けば淺茅色づく有乳山。上歌「笥飯の海、宮居久しき神垣や、松の木目山、猶

筍飲の海　越前敦賀港のあたりの海。
木目山　敦賀郡と南條郡との境。
板取　近江と越前との境。
朝津　越前足羽郡にあり。
三國の湊　越前坂井郡にあり。
篠原　加賀の江沼郡にあり。
安宅　同上。

行く前に見えたるは、*柳山人の*板取、河瀬の水の朝津（ケヅサウジ）や、末は*三國の湊なる、蘆の*篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の*安宅に著きにけり、花の安宅に著きにけり。（シテ）「御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著きにて候。暫く此處に御休みあらうずるにて候。（判官）「いかに辨慶。（シテ）「御前に候。（判官）「唯今旅人の申して通りつる事を聞いてあるか。（シテ）「いや何とも承らず候。（判官）「安宅の湊に新關を立てゝ、山伏をかたく選むとこそ申しつれ。（シテ）「言語道斷の御事にて候ものかな。扨は御下向を存じて立てたる關と存じ候。これはゆゆしき御大事にて候。まづ此の傍にて暫く御談合あらうずるにて候。これは一大事の御事にて候間、皆々心中のとほりを

御意見御申しあらうずるにて候。（山伏）「我等が心中には、何程の事の候べき。ただうち破つて、御通りあれかしと存じ候。（シテ）「しばらく。仰の如く、此の關一所打破つて御通りあらうずるは易きことにて候へども、御出で候はむずる行く末が御大事にて候。唯何ともして無異の儀が然るべからうずると存候。（判官）「ともかくも、辨慶計らひ候へ。（シテ）「畏つて候。某きつと案じ出したる事の候。我等を始めて、皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿かくれ御座なく候間、このまゝにては如何と存候。恐多き申事にて候へども、御篠懸を除けられ、あの強力が負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、如何にも草臥れたる御體にて、我等よ

り後にひき、さがつて御通り候はゞ、なか〳〵人は思ひもより申すまじきと存じ候。判官「げにこれは尤もにて候。さらば篠懸を取り候へ。シテ「畏つて候。如何に強力。狂言「御前に候。シテ「笈を持ちて來り候へ。狂言「畏つて候。シテ「汝が笈を御肩に置かるゝことは、なんぼう冥加もなきことにてはなきか。まづ汝はさきへ行き、關の様躰を見て、眞に山伏を選むか、またさやうにもなきか懇に見て來り候へ。狂言「しかじか。シテ「さらば御立あらうずるにて候。げにや紅は園生に植ゑても隱なし。山同「強力にはよも目を懸けじと、御篠懸を脱ぎかへて、麻の衣を御身に纏ひ。シテ「あの強力が負ひたる笈を。判官「義經とつて肩に掛け。山同「笈の上には、雨皮(マカハ)肩箱とり附けて。判官「綾菅笠にて顔を隱し。山同「金剛杖に縋り。判官「足痛げなる強力にて、よろ〳〵として歩み給ふ御有様ぞ痛はしき。シテ「我等より後にひき下つて御出であらうずるにて候。さらば皆々御通り候へ。山伏(ツレ)「承り候。

一四　安宅その二

狂言「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。ワキ「何と山伏の御通りあると申すか。心得てある。のう〳〵客僧たちこれは關にて候。シテ「承り候。これは、南都東大寺建立の爲に、國々へ客僧を遣され候。北陸道をばこの客僧承つて罷り通り候。まづ勸めに御入り候へ。ワキ「近頃殊勝に候。勸に

はまゐらうずるにて候さりながら、此は山伏に限つて止め申す關にて候。（シテ）「扨そのいはれは候。（ワキ）「さん候、賴朝・義經、御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を賴み給ひ、十二人の作山伏となつて、御下向の由其の聞え候間、國々に新關をたてゝ、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間此處をば某承つて山伏を止め申候。殊にこれは大勢御座候間、一人も、通し申すまじく候。（シテ）「委細承り候。それは作山伏をこそ止めよと仰せ出され候ひつらめ。よも眞の山伏をとめよとは仰せられ候まじ。（狂言）「いや昨日も山伏を三人まで斬つたる上は。（シテ）「扨その斬つたる山伏は判官殿か。（ワキ）「あらむつかしや問答は無益。一人も通し申すまじ

富樫と辯慶

い上は候。（シテ）「扨は我等をも、これにて誅せられ候はむずるな（ワキ）なかなかのこと。（シテ）「言語道斷。かかる不祥なる處へ來かかつて候ものかな。此の上は力及ばぬ事。さらば、最期の勤を始めて、尋常に誅せられうずるにて候。皆々近う渡り候へ。（ツレ山伏）「承り候。（シテ）「いで〳〵最期の勤を始めむ。それ山伏といつば、役の優婆塞の行儀を受け。

ッレ「その身は不動明王の尊容をかたどり。　シテ「兜巾といつば五智の寶冠なり。　同山「十二因緣の褶をすゑて戴き。　シテ「九會曼陀羅の柿の篠懸。　同山「胎藏黑色の脚半をはき。　シテ「扨又八目の藁鞋は。　同山「八葉の蓮華をふまへたり。　シテ「出で入る息に阿吽の二字を唱へ。　同山「卽身卽佛の山伏を。　シテ「此處にて討ちとめ給はむ事。　同山「明王の照覽計り難う。　シテ「熊野權現の御罰のあたらむ事。　同行山伏「立處において。　シテ「疑ひあるべからず。　唵阿毘羅吽欠と數珠さら〳〵とおし揉めば。　ワキ「近頃、殊勝に候。　前に承り候ひつるは、南都東大寺の勸進と仰せ候間、定めて、勸進帳の御座なきことは候まじ。　勸進帳を遊ばされ候へ。　これにて聽聞いたさうずるにて候。　テ「何

と、勸進帳を讀めと候や。　ワキ「中中の事。　シテ「心得申して候。本より勸進帳はあらばこそ、笈の中より往來の卷物一卷取出し勸進帳と名づけつゝ、高らかにこそ、讀みあげけれ。

夫つら〳〵、惟みれば大恩敎主の秋の月は、涅槃の雲に隱れ、生死長夜の長き夢、驚かすべき人もなし。　爰に中頃帝おはします。　御名をば、聖武皇帝と名づけ奉り、最愛の、夫人にわかれ、戀慕やみがたく、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思ひを、善途に飜して盧舍那佛を建立す。　かほどの靈場の、絕えなむことを悲しみて、俊乘房重源、諸國を勸進す。　一紙半錢の、奉財の輩は、この世にては無比の樂にほこり當來にては、數千蓮華の上に坐せむ。　歸命稽首、敬つて白す

と、天も響けと讀みあげたり。（ワキ）「關の人々肝を消し、恐をなして、通しけり、恐をなして通しけり。（ワキ）「急いで御通り候へ。（シテ）「承り候。（狂言）「いかに申上候。判官殿の御通り候。（ワキ）「いかに此なる強力とまれとこそ。（山伏）「すはわが君を怪しむるは、一期の浮沈極りぬと、皆一同に立ち歸る。（シテ）「ああ暫く、あわてて事を仕損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。（ワキ）「あれは此方よりとめて候。（シテ）「それは何とて御とめ候ぞ。（ワキ）「あの強力がちと人に似たると申す者の候程に、さてとめて候よ。（シテ）「何と人が人に似たるとは、珍しからぬ仰にて候。偖、誰に似て候ぞ。（ワキ）「判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間留めて候。（シテ）「や、言語道斷、判官殿に似申したる強力めは一期の思ひ出な。腹立ちや日高くは、能登の國まで指さうずると思ひつるに、僅かの笈負うて後にさがればこそ人も怪しむれ。惣じて此の程、憎し憎しと思ひつるに、いで物見せてくれむとて、金剛杖をおつ取つてさんざんに打擲す、通れとこそ。や、笈に目をかけ給ふは、盗人ぞうな。（地）「方々は、何故に、かたがたは何故に、斯程賤しき強力に、太刀・刀ぬき給ふはめだれ顔のふるまひは、臆病の至かと、十一人の山伏は、打刀抜きかけて、勇みかゝれる有様は、如何なる天魔・鬼神も、恐れつべうぞ見えたる。（ワキ）「近頃誤りて候。はやはや御通り候へ。

一五　安宅　その三

シテ「さきの關をば早拔群に程隔りて候間、此處に暫く御休あらうずるにて候。皆々近う御參り候へ。いかに申上候。偖も唯今は餘りに難儀に候ひし程に、不思議の働を仕り候事これと申すに君の御運、盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にもあたらせ給ふと思へば、いよ〳〵あさましうこそ候へ。

判官「さてはあしくも心得ぬと存ず。いかに辨慶、扨も唯今の機轉更に凡慮よりなす業にあらず。唯天の御加護とこそ思へ。關の者ども我を怪しめ、生涯限りありつる所に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、さん〳〵に打つて我を扶くる、是辨慶が謀にあらず八幡の、御託宣かと思へば、忝くぞ覺ゆる。

地「それ世は末世に及ぶといへども、日月は未だ地に墜ち給はず。たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の天罰に、當らぬことやあるべき。

判官サシ「げにや、現在の果を見て過去・未來を知るといふ事、今に知られて身の上に、憂き年月のきさらぎや、下の十日の今日の難を逃れつるこそ不思議なれ。

判官「唯さながらに十餘人、夢の覺めたる心ちして、互に面を合せつゝ、泣くばかりなる、ありさまかな。

クセ「然るに義經、弓馬の家に生れ來て、命を賴朝に奉り、屍を西海の浪に沈め、山野・海岸に起きふしあかす武士の、鎧の袖枕、かたしく隙も波の上、或時は舟に浮み、風波に身を任せ、或時は、山脊の、馬蹄も見えぬ雪のうちに、海少し

ある夕波の立ち來る音や須磨・明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡し靡く世の、其の忠勤も徒に、なりはつる此の身の、そも何といへる因果ぞや。判官「げにや思ふ事、かなはねばこそ憂世なれと。同「知れども、さすが猶、思ひかへせば梓弓の直なる、人は苦しみて讒臣は、彌ましに世にありて、遼遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。怨めしの憂き世や、あら怨めしのうき世や。ワキ「いかに誰かある。狂言「御前に候。ワキ「さても山伏たちに聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つつき申し酒を一つ參らせうずるにてあるぞ。汝は先へ行きてとめ申候へ。狂言「畏つて候。いか

に申し候。さきには聊爾を申して餘りに面目もなく候とて、關守のこれまで酒を持たせて參られて候。シテ「言語道斷の事。やがて御目に懸らうずるにて候。狂言「しかじか。シテ「げに〳〵これも心得たり。人の情の盃に、うけて心をとらむとや。これにつきても猶々人に、心なくれそ吳織、怪しめらるな面々と、辨慶に諫められて、此の山陰の一宿りに、さらりと圓居して、處も山路の菊の酒を飲まうよ。シテ「面白や山水に、面白や山水に、盃を浮めては、流にひかるゝ曲水の、手まづ遮る袖ふれていざや舞を舞はうよ。もとより辨慶は、三塔の遊僧、舞延年の時の和歌。是なる山水の、落ちて巖に響くこそ。地「鳴るは瀧の水。シテ「たべ醉ひて候程に、先達お酌に

まゐらうずるにて候。ワキ「さらばたべ候べし。とてもの事に先達一さし御まひ候へ。シテ「承り候。地「鳴るは瀧の水。シテ「なるは瀧の水。「日は照るとも、絶えずとうたり疾く〳〵立てや。手束弓の、心ゆるすな。關守の人々。暇申してさらばよとて、笈をおつとり、肩にうち懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を、逃れたる心地して、陸奥の國へぞ、下りける。

一六　箱根山

賀茂眞淵

明けゆくまゝに、けふは富士のねに雲の塵もゐず、ゆく〳〵見むとて、馬にてぞ過ぐる。古に擬ふる長歌よまむとて、馬の上によひつれど、ねむたさに、さだかにも續けられねば、復こそと思ひて、半ばにてやみぬ。三島に宿りぬ。夜をこめて箱根路のぼる。

誰かしる故郷さふる山々を
月に眺むる夜のあはれは

分け入るまゝに、身にしみ返る深山の秋風、鹿の音ながらうち吹くめるを、聲きく時ぞとは、かゝる折こそと覺ゆ。此の山をしも越えば故郷は空さへ見えじと思ふに、更に名殘覺ゆるあけがたなり。峠の宿を過ぎゆけば、杉村の小暗きに、霧たちこめたる袖のしめりもたゞならず。

故郷の空さへ見えぬ箱根山

三島　伊豆國、田方郡に在り。

聲きく時　奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき。（古今集、讀人知らず）

故郷　遠江を指す。賀茂眞淵は遠州の人。

こゆる驛のすゞろにぞうき
山々のもみぢ葉色々のゆはたをたち交へたらむが如く、世には染むべくもあらぬ梢ども、草の葉さへしぐれあへり。いかで旅ならで見ばやとぞ思ふ。戸塚の宿にやどれり。思ひ續けつる事も、疲れにければ、筆ならで枕をぞとる。十七日の晝つ方、品川わたりに到る。はるゝと望めば、舟より歩よりつどふもの多かるに、かしこき御勢の仰がれて、旅の疲もおぼえず。

大君のとほのみやこの八十の津に
ところせきまでうくたからかな

ふるびにたるかな、家持が集にやいれましとて人々笑ふ。

戸塚　相模鎌倉郡に在り。
品川　武州荏原郡にあり。東京の入口なり。
家持が集　萬葉集は、家持の手を經たるものなりといふ。

一七　菅公の左遷

醍醐の帝の御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとど右大臣の位にておはします。そのをりみかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかり、右大臣御歳五十七八ばかりにやおはしけむ。ともに世の政うちせしめ給ひし間、右大臣は才も世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはしまし、左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしました

時平のおとど　藤原氏。基經の長子。
菅原のおとど　道眞。是善の子。
みかど云々　醍醐天皇にて御年十三にて御即位。

るに、左大臣安からずおぼしたる程に、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬ事出で來て、昌泰四年正月二十九日太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。

昌泰四年　醍醐天皇の年號。此の年延喜と改元す。（一八八）

この大臣の子ども數多おはせしに、女君だちは壻取し、男君だちは皆程々につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君・女君だち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ。」と公も許さしめたまひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さざりけり。方々にいと悲しく思し召して、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花
　あるじなしとて春なわすれそ

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

亭子の帝　宇多法皇。

流れゆくわれは水屑となりはてぬ
　君しがらみとなりてとどめよ

なき事により、かく罪せられ給ふをからく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

山崎　山城乙訓郡にあり。

君がすむ宿の梢をゆく〳〵も
　隱るゝまでにかへりみしはや

また播磨の國におはしつきて、明石のうまやといふ處に御

宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作らしめ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改　一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし著きて、あはれに心細く思さるゝ夕べ、遠方に處々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも山にもたつけぶり
なげきよりこそ燃えまさりけれ

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る
かげ見るときぞなほ賴まるゝ

さりともと、世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

大貳の居所　太宰府。

海ならずただよふ水の底までも
きよきこゝろは月ぞてらさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居處は遙かなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の響をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色　觀音寺只聽鐘聲

「これは文集の白居易が『遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峯雪撥簾看。』といふ詩にもまさざまに作らしめたまへり。」とこそ、昔の博士

どもは申しけれ。

またかの筑紫にて九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましゝ時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに、この大臣作らしめ給へりける詩を、御門かしこく感じ給ひて御衣たまはせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとどその折思しめしいでて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼　秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣今在此　捧持毎日拜餘香

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。この事ども、只ちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを書集め、一卷とせしめたまひて後集と名づけられたり。又折々の歌を書きおかせ給へりけるを、おのづから世に散りきこえしなり。又雨の降る日うちながめ給ひて、

あめの下かわける程のなければや
著てしぬれぎぬひるよしもなき

やがてかしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこらの松をおほさしめたまうて、渡りすみ給ふこそは、ただいまの北野宮と申して、あら人神におはしますめれ。おほやけも行幸せしめたまふ。いとかしこくあがめたてまつり給ふめり。筑紫のおはしまし所は安樂寺といひて、公より別當所司などなさせたまひて、い

後集　菅家後集。

北野宮　官幣中社北野神社、京都の西北隅にあり。

安樂寺　筑前國御笠郡太宰府村に在り。

とやむごとなし。（大鏡）

一八　赦文

治承二年（高倉天皇の年號。（一八三八））正月一日の日、院の御所には拜禮行はれて、四日の日朝覲の行幸ありけり。何事も例に變りたる事はなけれども、去年の夏、新大納言成親の卿以下近習の人々、多く流し失はれし事、法皇（後白河法皇。）御憤未だ止まざれば、世の政事をも、よろづ物憂く思しめして、御快からぬ事どもにてぞ候ひける。太政入道も、多田の藏人行綱（源氏。）が告知らせ奉りて後は、君をも御後めたき事に思ひ奉り、上には事なきやうなれども、下には用心して、苦笑ひてのみぞ候はれける。七日の日、彗星東方に出づ、蚩尤氣（支那の黃帝の時蚩尤叛く、時に彗星出でたり。故にいふ。）とも申す。十八日光を益す。入道相國の御女建禮門院、その時は未だ中宮と聞えさせ給ひしが、御惱とて、雲の上、天が下の歎にてぞ候ひける。諸寺に御讀經始り、諸社へ官幣使を立てらる。陰陽術を極め、醫家藥を盡し、大法・秘法一つとして殘る所なく修せられけり。されども御惱たゞにも渡らせ給はず、御懷妊とぞ聞えし。主上は今年十八、中宮は二十二にならせ給ふ。然れども、未だ皇子も姫宮も出來させ給はず。「若し皇子にてましまさば、如何にめでたからむ。」と、平家の人々も、只今皇子誕生あるやうに勇み悅びあはれけり。他家の人々も「平氏繁昌折を得たり。皇子御誕生、疑なし。」とぞ申し合はれける。御懷妊

定まらせ給ひしかば、入道相國、有驗の高僧貴僧に仰せて、大法・秘法を修し、星宿・佛菩薩に告げて、皇子御誕生とのみ祈誓せらる。六月一日の日、中宮御着帯ありけり。仁和寺の御室守覺法親王急ぎ御參内ありて、孔雀經の法を以て御加持あり。天台座主覺快法親王、寺の長吏圓慶法親王も、同じく參らせ給ひて、變成男子の法を修せられけり。

かゝりし程に、中宮は月の重るに從ひて、御身を苦しくせさせ給ふ。一度笑めば百の媚ありけむ漢の李夫人、照陽殿の病の床もかくやと覺え、唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨を帶び、芙蓉の風に萎れつゝ、女郎花の露重げなるより、猶痛はしき御樣なり。かゝる御惱の折節に合せて、こはき御物氣ども

讃岐の院　崇德上皇。

宇治の惡左府　藤原頼長。

鬼界が島の流人ども　平判官康頼、丹波少將藤原成經、法性寺の執行俊寛。

むしよ　墓所。

早良の廢太子　光仁天皇の皇子、桓武天皇の皇太子。

數多取り入れ奉る。神子明王の縛にかけて、靈顯れたり。殊に讃岐の院の御靈、宇治の惡左府の御憶念、新大納言成親の卿の死靈、西光法師が惡靈、鬼界が島の流人どもの生靈などぞ申しける。是に因りて生靈をも死靈をも宥めらるべしとて、先づ讃岐の院の御追號ありて、崇德天皇と號し、宇治の惡左府、贈官贈位行はれて太政大臣正一位を贈らる。勅使は少内記維基とぞ聞えし。件のむしよは大和國添上の郡、河上の村般若野の五三昧なり。保元の秋、掘起して捨てられし後は、死骸道の邊の土となりて、年々にただ春の草のみ繁れり。今勅使尋ね來て、宣命を讀みければ、亡魂・尊靈如何に嬉しと思しけむ。されば早良の廢太子をば崇道天皇

井上の內親王　聖武天皇の皇女、光仁天皇の皇后。
元方の民部卿　元方の女村上天皇の更衣となり廣平親王を生む。されど師輔の女の出冷泉天皇、皇位に即せられしを以て元方、憤死せり。
桓算供奉　桓算は僧の名。供奉に禁中に供奉する僧官。
門脇の宰相　平敎盛。宰相は參議の唐名。

と號し、井上の內親王をば皇后の式位に復す。是皆怨靈を宥められし策とぞ聞えし。怨靈は昔も怖ろしかりし事どもなり。冷泉院の御物狂ほしくまし〳〵、花山の法皇の十善の帝位をすべらせ給ひしは、元方の民部卿が靈なり。又三條の院の御目も御覽ぜられざりしは、桓算供奉が靈とかや。門脇の宰相、かやうの事どもを傳へ聞き給ひて、小松殿に申されけるは、「今度中宮、御產の御祈樣々に候なり。何と申すとも非常の赦に過ぎたる程の事有るべしとも覺え候はず。中にも鬼界が島の流人どもを、召還されたらむほどの功德善根何事か候べき。」と申されたりければ父の禪門の御前におはして、「あの丹波の少將がことを門脇の宰相、餘り

に嘆き申すが不愍に候。殊更中宮御惱の御事、承り及ぶ如くんば、成親卿が死靈など聞えて候。大納言が死靈を宥めむと思しめさむにつけては、生きて候少將を召しこそ還されて候はめ。人の思をやめさせ給はゞ、思しめす事も叶ひ、人の願を叶へさせましまさば、御願も則ち成就して、御產平安、皇子御誕生ありて、家門の榮花益〻盛に候べし。」など申されければ、入道相國、日比より事の外に和ぎて、「俊寬や、康賴法師が事は、如何に。」と宣へば「それも同じくは召しこそ還され候はめ。若し一人も殘されたらむは、中々罪業たるべく候。」と申されたりければ、入道相國、康賴法師が事はさることなれども、俊寬は隨分入道が口入を以て、人となしたる者ぞかし。

それに所しもこそ多けれ、東山鹿の谷我が山庄に寄りあひて、奇怪の振舞どもがありけむなれば、俊寛が事は思ひも寄らず。」とぞ宣ひける。

大臣歸りて、叔父の宰相を呼び奉りて、「少將は既に赦免あるべきにて候ぞ。御心安く思し召され候へ。」と申されたりければ、宰相聞きもあへ給はず、泣く〳〵手を合せてぞ悅ばれける。「下り候ひし時も、是程の事などや申し受けざらむと思ひたりげにて、敎盛を見候度毎に、涙を流し候ひしが不愍に候。」とぞ申されける。小松殿「誠にさこそは思し召され候らめ。子は誰とても悲しければ、よく〳〵申し候はむ。」とて入りたまひぬ。さるほどに鬼界が島の流人どもの召還さるべき事定まりしかば、入道相國の赦文書きてぞたうでける。御使既に都を立つ。宰相餘りの嬉しさに、御使に私の使を添へてぞ下されける。「夜を晝にして急ぎ下れ。」とありしかども、心に任せぬ海路なれば、波風を凌いで行く程に、都をば七月下旬に出でたれども、九月二十日比にぞ鬼界が島には着きにける。（平家物語）

一九　鬼界が嶋

御使は丹左衞門の尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り、「是に都より流され給ひたりし平判官康頼入道・丹波の少將殿やおはす。」と、聲々にぞ尋ねける。二人の人々は、例の熊野

詣してなかりけり。　俊寛一人ありけるが、是を聞きて、「餘りに思へば夢やらむ、又天魔・破旬の我が心を誑さむとていふやらむ。　現とも更に覺えぬ者哉。」とてあわてふためき、走るともなく倒るゝともなく、急ぎ御使の前に行向ひ、「是こそ流されたる俊寛よ。」と名乘り給へば、雜色が頸に懸けさせたる布袋より、入道相國の赦文を取出で奉る。　是をあけて見給ふに、「重科は遠流に免ず、早く歸洛の思をなすべし。　今度中宮御産の御祈によりて、非常の赦行はる。　然る間、鬼界が島の流人、少將成經・康頼法師、赦免」とばかり書かれて、俊寛といふ文字なし。　禮紙にぞあるらむとて、禮紙を見るにも見えず、奥より端へ讀み、端より奥へ讀みけれども、二人とばかり書かれて三人とは書かれず。　さる程に少將や、康頼法師も出で來り、少將の取りて見るにも、康頼法師が讀みけるにも、二人とばかり書かれて、三人とはかゝれざりけり。　夢にこそかゝることはあれ、夢かと思ひなさむとすれば現なり。　現かと思へば又夢の如し。　其の上二人の人々の許へは、都より言傳てたる文ども、幾らもありけれども、俊寛僧都の許へは、事問ふ文一つもなし。　されば我が緣の者どもは皆都の内に跡を止めずなりにけるよ、と思ひ遣るだに覺束なし。　抑〻我等三人は同じ罪、配所も同じ所なり。　如何なれば赦免の時、二人は召還されて、一人こゝに殘すべき。　平家の思ひ忘れかや、執筆のあやまりか、こは如何したる事どもぞや。」と、

天に仰ぎ地に伏して、泣き悲しめども甲斐ぞなき。僧都、少將の袂にすがり、「俊寛が斯樣になるといふも、御邊の父、故大納言殿の、よしなき謀叛の故なり。されば他所の事と思ひ給ふべからず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめては此の船に乘せて、九國の地まで着けて給べ。各、是におはしつる程こそ、春は燕、秋は田の面の雁の音づるゝやうに、おのづから故郷の事をも傳へ聞きつれ、今より後は何としてか聞くべき。」とて悶え焦れ給ひけり。少將「誠にさこそは思しめされ候らめ。我等が召還さるゝ嬉しさも、さることにては候へども、御有樣を見奉るに、更に行くべき空も覺え候はず。此の船に打乘せ奉りて、上りたくは候へども、都

故大納言殿　藤原成親。

の御使如何にも叶ふまじき由を頻に申す。その上赦されもなきに、三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はゞ、中々惡しく候ひなむず。成經先づ罷り上りて、人々にもよく申し合せ、入道相國の氣色をも伺ひ、迎に人を奉らむ。其の程は日頃おはしつるやうに思ひなして待ち給へ。命は如何にも大切のことなれば、假令此の瀨にてこそ洩れさせ給ふとも、終にはなどか赦免なくて候べき。」と、やう〳〵に慰め宣へども、僧都堪へ忍ぶべくも見え給はず。

さるほどに、船出さむとしければ、僧都船に乘りては下りつ、下りては乘りつ、あらまし事をぞし給ひける。少將の形見には、夜の衾、康賴入道が形見には、一部の法花經をぞ止めけ

る。既に纜解きて船おし出せば、僧都船に取りつき、腰になり脇になり、丈の立つまでは引かれて出づ。丈も及ばずなりければ、僧都舟に取りつき、「さて各、俊寛をば、終に捨てはて給ふか。日頃の情も今は何ならず。赦されなければ、都までこそ叶はずとも、せめてこの船に乘せて、九國の地まで。」と口説かれけれども、都の御使、如何にもかなひ候まじとて、取附き給ひつる手を引きのけて、船をば、終に漕ぎいだす。僧都せむ方なさに渚に上り、倒れ伏し、稚きものの、乳母や母などを慕ふやうに足摺をして、「これ乘せて行け、具して行け。」と宣ひて、をめき叫び給へども、漕ぎゆく船の習ひにて、跡は白波ばかりなり。未だ遠からぬ船なれども、涙に暮れて見えざりければ、僧都高所に走り上り、沖の方をぞ招きける。かの松浦小夜姫が唐船を慕ひつゝ領巾振りけむも、是には過ぎじとぞ見えし。

さる程に船も漕ぎ隱れ、日も暮るれども、僧都あやしの臥處へも歸らず、波に足打洗はせ、露に萎れて、其の夜は其處にて明しける。「さりとも、少將は情深き人なれば、能き様に申す事もや。」とたのみを懸けて、其の瀬に身をも投げざりし心の中こそはかなけれ。昔そうり・そくりが、海巖山へ放たれたりけむかなしみも、今こそ思ひ知られけれ。（平家物語）

そうり・そくりが云々　印度の昔話に壯里・息里の兄弟、繼母の爲に追放せられたりとの事あり。

二〇　學制に關する意見書

橋本景岳

明道館御取立之義は深き思召も在らせられ、政教一致、文武不岐と申す御標準にて、後々は士大夫仁讓節烈の風に興り、庶民時雍文化に移り候樣、年來御勞思被遊候御大願・御鴻業は、明道館中より御成就の基趾を開き候樣にとの御趣意に御坐候樣に奉欽承居候。　右は中々尋常容易の御趣向にては無御坐、實に古今之聖主賢輔も難んじ居られ候義に御坐候へば、御處置の次第に於て、先づ宏遠明確の御定案相定まり居候うて、一切模稜安排之御仕向等御脫却無御坐候はでは、迚も御滿願の期有之間敷奉存候。　偖愈、右の御趣意に相極り候上は、人材を得るの道を開き候事、肝要に奉愚考候。大抵人材を得るには、四箇條の要件御座候者にて、此を盡さずして材を得むとするは、夜行して日を見むと思ふ者と同樣の愚と申すべく奉存候。　四箇條の要件と申候は、第一材を知るの道、卽ち其の人の長ずる所を知りて、又其の短なる處をも看破致し居候事。　第二材を養ふの道。　已に其の材を知り候はゞ、又之を生育長養して、害を避けしめ、難を去らしめ、且其の支捂扞格の患を除くの術を盡して、其の志を遂ぐる事を得しめ候事。　第三材を成すの道。　之を養ふの方既に具らば、之に藝を教へ學を植ゑ、其を正道に誘き、實事に試み、遂に其の材を練熟して有用の者とならしむる事。　第四に材を取るの道。　材既に用に堪ふるの地に到り候はば、久しく下に淹滯廢棄致させ申さず、其を朝に薦めて其の堪

ふべき處の任に當らしむべき事。此の四道を兼ね行はざれば、材を得るの道は盡き申さず候。

四道の內に於ても、知材・成材の二道を盡し候事最も難しと奉存候。其の仔細は、千里の馬は必ず踶嚙の病ありて、跅弛の士には、必ず負俗の累御坐候事、今古の通患に御坐候上、兎角衰世の風儀、迂俗の舊習にて、怠懦畏怯、平弱柔媚の性質は大抵人にも被愛、其の上目立ちたる過失もなき樣に相見え候へ共、此等の輩は皆一生己が爲にする貪利と申す病根全治不仕者にて、學問に熟し候程面諛遁辭に長じ、古人の所謂鄕愿なるものに陷り、中々安心して倚賴すべき者にては無御坐候。其に引替へ、豪放磊落、跌蕩不羈、純正剛毅果烈狷介の性質こそ、末賴母しく被思候。併し此等の人物は、生才人に傑出致し居候者故、自分に恃む處ありて、人に就き人に屈し申さず、動もすれば庸人を輕蔑し、衆論に牴觸する患御坐候者にて、卽ち古より英雄・豪傑の人每度危禍に出遇候は、畢竟此に根ざし候事に御座候。右樣の性質に御座候故、兎角節を折き、書を讀み理を講ずる等の事は好み申さず、學問は厭棄致し易くして、度外に放擲候弊も往々有之候へども、如何に豪放・磊落・剛毅・狷介なればとて、道理に熟せず學術に明かならずしては、大節義・大機略を具へ、大作用・大處置を仕出來し候義、甚だ以て無覺束奉存候。此等の人物を誘導して、之を心折せしめ、之に學を積ませ藝術を磨致させ候うて

こそ、國家の御有用にも相成り、學問の光も顯れ可申奉存候。左なくして局々猥瑣の人物に、小廉・曲謹だけ教へ込み候は、小人の腹赤なる上に、表飾の道具を爲添候迄にて、外に益もなき義、學問と申す者は世に在る方、結局害と相成可申候。文武一致の御趣意に候故、今般武藝所御取立に相成り、造士の方に於ては次第に其の具備り、有難き御仕向に御座候。古來より迂儒の陋見にて、兎角技藝を卑視して、之を力修する者を譏嘲致し候。是誠に蒙昧不通の論に御座候。聖人の道と申すも、畢竟人倫日用の外には無之候へば、物外の道にてはなし、物外の道ならねば事を離れ候事は無之筈にて、所詮道は却つて、技よりして進入候者と愚考仕候。然るに

己の不能・拙劣を掩ふ爲、徒に空理の談を喜び、著實の技藝を嫌ひ候は、可笑の至に御坐候。古より聖賢の無能なる者一も有之候樣相見え不申候。聖賢と申すは多能にして、能を賴まず能に伐らず、技藝を修めて技藝に局せず、技藝の中に於て妙理の存する所を知り、衆藝の要一致に湊會する處に覺有之人と被考申候。

將又人材を得候は、唯教育薫陶の上に有之のみならず、又其の材を取りて其の長を爲展、併せて傍人をして觀感憤起せしめ、汚下に安んぜざらしむるの術亦肝要と奉存候。凡て人材は經世の藥石に御坐候へば、時態に依りて選擧の致し振り少々づゝ相變り、或は正直・剛果を重んじ、或は機敏・捷給

を主とし、或は道德を先にし、或は氣槩を擇み候樣の小差は可有之候へども、究竟忠義の士有用の材を採り候より外は無之して、其の能は、文武兼備は勿論、或は一方に長け候者にても、隨分有用の材と申者可有之候。　西土は從來文を貴び候國にて、文官を高くして政權を執らせ候故、文士中より非常の人材も出、經濟有用の大業を成し候に付、世の儒生輩、兎角學者さへ相用ひ候へば、國は治り候樣心得居申候へども、此は拘泥の甚だしき義に御坐候。　本朝は元來武を重んぜられ、御政體も武斷を尙ばれ候御風儀に御坐候うて、習俗も勁簡を喜び、繁縟を好不申、何れの代にも、武林より往々忠亮明快、廉潔剛正、百里の命を寄せ、六尺の孤をも託すべき人物輩出仕候事自然の勢にて、西土と同じからざる譯も數々御座候へども、當時の如く、世風追々打開け人心伶明に相成候上は、政權は自ら學術ありて道理に純熟致し候者に歸すべきは、此亦自然の勢に御坐候。

以上の條件四綱にして、其の要は人材を知り、之を養ひ、之を成し、之を取るの道に止り申候。　此の四綱に於て宏遠の御規模、明確の御猷謨、粗々相定まり候うて、御施設の御修理井然立居り申さず候はでは、前件の御大願御大業御成就の程甚だ以て無覺束奉存候。　畢竟四綱の不立は、全く三弊の脫せざるに依り、三弊の脫せざるは志不遠大、學術不純正に因り候義に御坐候。

當今の如く廓然御打明け御熟評御坐候上は、小臣抔庸劣愚直の者、唯隆恩感荷の情に盲らみ、聲情稔熟の際に泥み、凛冽の氣挫屈仕り、蹇諤の風衰祛致候義相覺え候事も御坐候。箇樣成り行き候うては、稽衆從人の御美事よりして、反て面從莫逆の邪徑を誘出し、上下共公平の心にて忠論讜言盡し候樣不被存、篤と省察仕候へば、聖賢相與に警戒する旨に乖き、國家御善政の御德輝を毀損仕候はむ歟と、深く恐怖仕候義に御坐候故、唐突不敬の譏を不顧、尊嚴の御威光をも不懼、叨りに冗語贅說拜陳仕候。臣紀、頓首々々、誠恐謹言。

安政四丁巳閏五月十五日

（橋本佐内全集）

二一　萬里の長城

土井晩翠

一

生ける歷史か數ふれば　齡は高し二千年
影は萬里の空遠き　名も長城の壁の上
落日低く雲淡く　關山看す〳〵暮れんとす
征驂悵み留りて　俯仰の遊子身はひとり
絕域花は稀ながら　平蕪の綠今深し
春乾坤に回りては　霞まぬ空も無かりけり
天地の色は老いずして　人間の世は移ろふを
歌ふか高く大空に　姿は見えぬ夕雲雀
嗚呼跡ふりぬ人去りぬ　歲は流れぬ千載の

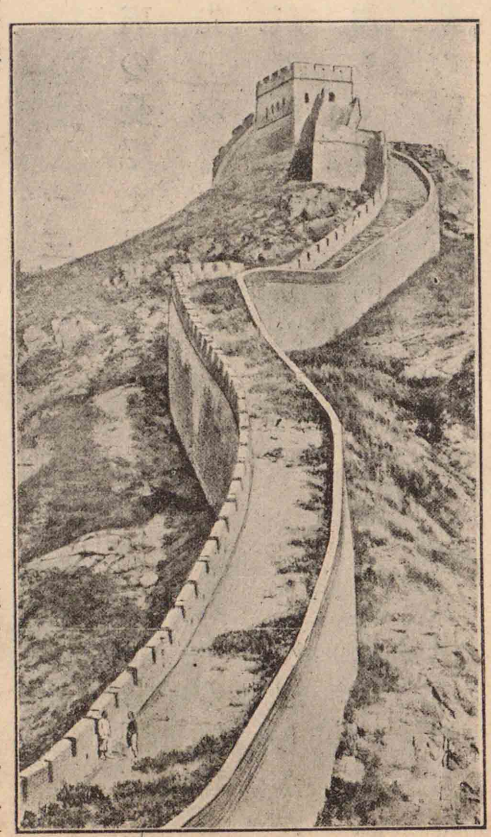
昔に返り何の地か　かれ秦皇の覇圖を見ん
殘壘破壁聲も無し　恨も暗し夕まぐれ
春朦朧のたゞ中に　俯仰の遊子身はひとり

二

三皇五帝あと遠く　六王終りて四海一
四海の黔首ひれふして　雷霆の威に聲もなし
わが宮殿を高うせよ　一たび呼べば阿房宮
わが邊境を固うせよ　二たび呼べば萬里城
春は驪山の花深く　秋は上郡の雲暗く
管絃響き雲に入る　舞殿の春の夕まぐれ
袂を擧げて輕く起つ　三千の宮女花のごと

六王終りて云々　杜牧之の阿房宮賦に「六王畢四海一、蜀山兀阿房出。」

花を散らして玉觥に　浮かす歌扇の風もよし
彫龍の欄奥深く　薫る蘭麝の香を高み
珠簾を洩るゝ銀燭の　光消えなで夜や明けん
西臨洮の嶺高し　こゝ遼東の谿深し
流を埋め山を截り　壘を連ぬる幾千里


萬里長城

かゞりの焔天を燒き　つるぎの光霜凍り
殺氣夏尙ものすごく　守るは猛士二十萬
漢のこなたに胡笳絶えて　匈奴の跡ぞ遠ざかる

三

北夷の憂絶え果てゝ　境は堅し國安し
先王の書も焚け果てぬ　天下の儒者も埋まりぬ
わが萬世の業成りぬ　君主の思しかなりき
知るや夜半の阿房宮　後庭深く森暗く
歌臺の響よそにして　獨り嵐のつぶやきを
浮世の花の一盛り　褪むるに早き色見ずや
聞け長城の秋の營　旌旗の暗に消ゆるとき

春靜か云々　始皇帝二十八年、徐市等をして童男童女五百人を率ゐて東海に行きて不死の藥を求めしむ。
沆瀣　露をいふ。楚辭に「餐二六氣一而飲二沆瀣一兮」
韓朝の一孤臣云々　張良博浪沙にて秦皇に鐵椎

またゝく光露帶びて　星の竊かにさゝやくを
富も力も一場の　夢覺め果てん後思へ

四

春*靜かなる東海の　綠を涵す波の上
不死の金闕遠くして　童女五百の舟いづこ
絳霞の光天上の　花とこしへに匂へども
土に下れば沆*瀣の　示すは獨り世の脆さ
至尊の榮は高くとも　名を玉籍に留め得じ
金人十二鑄なせども　彼に無象の劍あり
心を焦し身を碎く　あゝ韓*朝の一孤臣
爾の策は成らずとも　無*常の風は荒かりき

を抛つ。過つて副車に中つ。

無常の風云々　始皇三十七年、出遊して病み、砂丘の平臺に崩ず。祕して喪を發せず、轀輬車中に載せ一石の鮑魚を以て其の臭を亂る。

民の怒云々　阿房宮賦に「獨夫之心日益强固戍卒叫函谷舉、楚人一炬、可ㇾ憐焦土。」

霽れざる云々　同賦に「長橋臥ㇾ波、未ㇾ雲何龍、複道行ㇾ空、不ㇾ霽何虹」

天地靜かに夜は更けて
流れは咽ぶ秋の聲
思ふやいかに人力の
鐵椎血無し博浪沙

五

嗚呼死屍未だ冷えずして
暗君嗣ぎて上に在り
民の怒は火の如く
楚人の一炬閃きて
霽れざる空に虹懸けし
雲あらざるに龍飛べる

獨り圯橋のかたほとり
燃ゆる心も靜まりて
脆きを命の定まりと
鮑魚臭有り沙丘臺

かれ萬世の業いづこ
佞竪の害のなどあらき
戍卒は叫び兵は起ち
咸陽の宮皆焦土
複道の跡今いづれ
長橋の影はたいかに

斬蛇のつるぎ云々　漢の高祖嘗て夜、澤中を徑す。大蛇あり徑に當る、劍を拔きて之を斬る。老嫗哭して曰く吾は白帝の子なり、今赤帝の子之を斬ると。

衰蘭露に悲しめば
驪山の麓春去れば
斬蛇のつるぎ炎精の
甘泉殿の夜半の月
其の移り行く世の習
邊土に立てる長城の

六

邦は亡びて邦に嗣ぎ
鼎に移る朝二十
中華幾たび烽擧り
又越え去りし國民の

遺宮空しく草の宿
花ことごとく涙あり
光もさはれ極みあり
かれも浮雲の恨あり
二京の花をよそにして
連雲の影あゝ絶えず

人は代りて人を追ふ
歲は流るゝ曆二千
長城の壁越え來り
數さへいかに世々の跡

山川影は替らねど　春夢空しく跡もなし
群雄の覇圖いたづらに　殘すは獨り史上の名
獨り邊土に影絶えず　齡重ねて二千歲
殘壘苔に今青む　長城の影尊しや
民の膏血世の笑　逆政の形見それながら
歷史の色に染められし　萬里の影ぞ懷かしき
其の面影に忍びでゝ　泣くは懷古の露のみか
暮春の恨誰がために　霞も咽ぶ夕まぐれ

七

霞も咽ぶ夕まぐれ　遊子俯仰の物思ひ
北夷禦ぎし長城の　昔の跡は替らねど

時世空しく流れては　中華の姿あすいかに
秦漢魏晉移り行く　昔の跡を引換へて
西の嵐のふき寄する　黃海の波今あらし
西曆一千九百年　東亞の嵐あすいかに
中華の光先王の　道この民を救ひ得じ
愛を四海に傳ふべき　神人の敎いま空語
看ずや豺狼の慾飽かで　基督敎徒血をすゝり
群羊守る力無く　異敎の民の聲呑むを
俯仰古今の物思ひ　遊子の恨いつ盡きん
征驂悵み嘶ける　響を返す壁のもと
思ひも遠く眺むれば　霞たゞよふ大空の

自然の樂も絶え果てつ　關山暮れて星出でゝ
恨を含む長城の　姿は暗に呑まれ行く

八

さらば別れんとこしへに　わが長城の壁のもと
盡きぬ思は大空の　星の光に任せ置きて
其の星移る千載の　時の流の末遠み
替らで影を尙とめん　殘壘にまた忍びでゝ
我が世の今日を謠ふべき　後の詩人はわれ知らず
嗚呼永劫の脈搏は　何れの時か絶え果てん
人生舊を傷みては　千古替らぬ情の歌
破壁聲無き傍に　また落日の影を帶び

流るゝ光積り行く　三千の昔忍ぶ時
かれ永遠の聲擧げて　何の國語に謠ふらん
興廢移り悲喜まじる　一人の跡一國の跡
笑の蔭に涙あり　暗のあなたに光あり
玉樓の花風恨み　殘壘の嵐天の樂
嗚呼千載の後の世の　詩人よ既に君の歌
今も響けり長城の　暗に隱るゝ壁の中（曉鐘）

二二　曾我會稽山その一

近松門左衛門

裾野の御狩の御遊、鎌倉の騷動にて急ぎ歸御有るべしとの、時刻も雨に事延びて、假屋の騷ぎもいつしかに、辻の篝も影

薄く、晝の疲れの手枕に、短き夜半を鐘の聲、夢より夢を結びける。　時節よしと曾我殿原、鬼王兄弟を古郷へ返し、出で立つ祐成が裝束は、母上より給はりし秋の野に草盡し縫ひたる練貫の單ぎぬ、村千鳥の直垂の袖を結んで肩にかけ、黑鞘卷の太刀を佩き、竹の子笠の紐强く、上に下部の青合羽、陣松明に道照らさせ、先に進めば五郎時致、是も母より給はつた る白綾に鶴の丸縫ひたる袷衣、揚羽の蝶の直垂、赤木の柄の腰ざし、別當より給はつたる源氏重代友切丸、肩に打かけ紙合羽しめたる笠の怯れじと、跡に續いて立出でたり。

「いかに時致、母の御恩を徒に今宵敵を討たずんば、不孝といひ世の人口、生きたる甲斐も有るまじきに、天の惠みか

降る雨に、御寮の御立は延引す。　狩場の用意も事靜まる。殊には蒲の入道殿貸し給はつたる此の割符。　賴朝公の膝元へ通路自由と聞くなれば、祐經を討つは案の內。　假屋には定めて遊女數多有るべきぞ。　罪作りに手な負はせそ。　雨はいつも降りながら、今宵の雨ぞ身には染む。討死せしと聞えなば、思ひ切つたる御心にも、母の歎はいか計り。　悲しさよ。」

「仰にや及ぶべき。　祐經は籠中の鳥網代の魚、やはか洩らし候べき。　恐らくは此の時致、天魔破旬に出合ふとも、ちつとも怯まぬ魂。　今宵の雨は身に掛り、ぞつこん徹つてわぢわぢと物悲しう罷成る。　敵に出合ひ働かば、所々の

死を遂げむも計られず。最期の盃一つ飲うで給はれ。」腰に付けたる懸烏帽子に、降りくる雨を受け溜めて、祐成が手に渡せば、

「なう七度結んで兄と成り、六度契りて弟と成ると傳へ聞く。死替り兄弟の縁は切るまじ。」

とさらりと飲して指しければ、時致とつて押戴き、

「兄は親にて候へば、母うへの御盃も是に籠り、天の甘露仙家の醬、此の酒に勝らむや。」

と受けては飲み、降りくる雨は恩愛の、親と妻との血の涙、親子夫婦の血を飲むと思ひ知らぬぞ哀なる。五月雨の一頻りをだゆみて、空さりげなく晴々と北斗の光鮮かに晴渡れば、安西の彌七郎、新開の荒四郎、旅裝束に下部を引具し、「雨も晴れて候ぞ、君は明日五つの御發駕。先手は追付けお立の御用意。」と呼ばらせ打つて通る。兄弟はつと顔見合せ、「此の騒に亂れ入り、討つて本望達せむ。」と袖摺違へ駈通る。

「こりや〳〵、何奴なれば御假屋の傍近く、斷りもなく忍び行く。馬盗人か盗賊か、それ搦めよ。」

とひしめけば、祐成騒がず、

「いや苦しからず。鎌倉より祐經殿へ密々の御用の使。咎め立してかたがた所領の仇ばししし給ふな。疑はしくば見られよ。」

と首に掛けたる通路の割符、「是見られよ。」と指出す。兩人恂り詞を替へ、「存ぜぬ事とて雜言申せし御免有れ。新開・安西咎めたりとは祐經殿へは必ず沙汰なしに賴み入る。假屋へは此の辻を左へきれ、行當りの大構、いざ御通り候へ。」と馬鹿慇懃の空輕薄、結句敵の引入を仕濟まし顏に別れける。

二三　曾我會稽山その二

兄弟遁るゝ鰐の口、虎の威を借る此の割符、蒲殿の御恩ぞと、御寮の假屋の傍近く、忍び入るこそ危けれ。

右左の假屋騷ぎ立ち「お先手は發足の御觸有り。合羽は取置き、腰錢を取落すな。馬よ鞍よ。」と犇けば、兄弟彌〻氣も急がれ、

「祐經が假屋とてもさぞ有らむ。是迄忍びし甲斐もなく、此の雨の降り止む事、神明にも見放され、よく〳〵武運に盡きしか。」

と拳を握り齒を鳴らし、虛空を白眼んで立つたる所、秩父の執權本田の次郎近經小具足に身をかため、本陣の夜廻りしてけるが、曾我殿原と見るよりも近々と歩みくる。

兄弟「誰ぞ。」と咎むれば、「波に搖らるゝ沖津船。知邊の磯は此方ぞ。」と囁く聲に祐成はつと嬉しく、

「重忠公の御情、又は御身の御懇情、此の度に限らねども御禮申す事もなく、禮儀知らずとや思されむ。今宵年來の

大望達せむと存ずる所、俄かに雨晴れ、假屋々々は出足の用意。此の騷には覺束なし。此の儘歸つていつの時をか期すべき。無二無三に切込んで、兄弟屍を晒す所存。重忠公へ一生積る御禮は貴殿の執りなし賴み入る。」

と云ひければ、兄弟が耳に口を寄せ、

「氣遣ひばしし給ふな。祐經は明日君の御馬の御供。それ故假屋も寢靜まる。こなたへ〳〵、靜かに。」

と道の案内の杖柱、嬉しさ類ひはなかりけり。

「是こそ祐經が臥床なり。心靜かに本意を遂げ、會稽の耻を雪がれよ。」

「御案内の程五百生の體を燒くとも、いかでか報じ盡すべき。隨つて通路の此の割符、蒲の入道殿より、密かに拜借申せしかど、御切腹の跡なれば、返辨申さむ樣もなし。我が死體にあれば、蒲殿こそ御勘氣の伊東が末の曾我に組し、反逆の族よと、死後の虛名に御骸を瀆さむ事、御恩を却つて仇にて報ずる道理。近經殿に預け置く、然るべく賴み存ずる。」

と二枚の小札を手に渡せば、

「尤も〳〵。近經に任されよ。主人重忠惡くは計らひ申されまじ。老母の事もゆめ〳〵麁略候まじ。今暫くと存ずれども、役目なれば知らぬ顏。弓矢の禮儀是迄。」

と本田は假屋に入りにけり。

「今は何をか期すべき。」と兄弟合羽かなぐり捨て、本田が教へし敵の假屋は是なりと、木戸・駒寄を飛越え、跳越え、兄弟莞爾と打笑ひ、天にも上る心地にて、難なく臥床に討つて入る。次に伏したる宿直の侍、足音に目を覺し、「すは盜人よ。」と呼ばはつて逃げいづる。假屋〳〵に聞きつけて、「そりや盜人よ、御立よ。」と騷の上にまた混亂。相圖響かす大鼓・鉦、かん〳〵どん〳〵どんくさい。又雨が延びて來た、お立が降ると入るも有り。雨の足音さつさつさ。人の足音どろ〳〵〳〵。右往左往にもてかへす。其の隙に兄弟は敵工藤祐經を思の儘に討負せ、門外に走り出で、袂を絞つて喉を濕し、勢ひ猛に立つたりし心の內こそ嬉しけれ。

「えゝ心地よい時致。年月の思にくらぶれば、敵を討つは易かりしな。餘り嬉しさ心急いて忘れしが、祐經に止めを刺しつるか。」

「あれ程に切る上はなんの仔細か候べき。」

「いや然はなし。跡にて實檢有らむ時、敵を討つたれども止めを刺さぬは狼狽へたりと云はれむは、骸の上の耻辱ぞかし。五郎如何に。」

と有りければ、「尤も」と打頷き、誰をか恐れ忍ぶべき。のつさのつさ假屋の步み板、ぐはつた〳〵踏鳴して引返し、障子・襖はら〳〵と蹴放し、祐經が死骸にどうと跨り、

「能つく聞け祐經。一念の瞋恚に依つて敵と成り味方と

成る。六根の罪障消滅し、不退の彼岸に到れよ。」

と腰の指添を抜き、

「そも此の刀は箱根にて初めて見參したる時、得させたる赤木の小刀。御邊元の主なれば鐵の味は知りつらむ。只今返す受取れ。」

と右手の耳の下よりもゆん手へ通れと刺す程に、耳と口とを一蓮托生。「南無阿彌陀佛」と回向して元の所へ立歸るに、手指す者さへなかりけり。

祐成待受け、

「落ちば此の儘落つべけれども、隱れ忍んで一生を暮さむは生きたる甲斐は有るまじ。一足にても逃ぐるとは弓矢の耻辱。殊更我々故に御生害有る蒲殿の御恩、御供申さで叶はぬ命。浪人の我々が錆太刀と、奉公日の出の殿ばらが、双を試して討死せむ。」

「尤も」と二人等しく大音上げ、

「伊豆の國の住人伊東の次郎祐親が孫、河津の三郎が二人の子、曾我の十郎祐成、同じく五郎時致、親の敵工藤左衞門祐經を討留めたり。頼朝公の御内に弓取はなきか。折合ひて打留めよ。」

闇さは暗し、雨は降る。假屋〳〵に「すは夜討」と弓一挺太刀一振に、五人三人取附いて「我よ人よ。」と奪ひあひ、繋ぎ馬に鞭打つて遲しとあせる所も有り。鎧に辷り兜に躓き、小手を

臑當、草鞋を笠、上を下へと犇けば、御馬屋の德竹大聲上げ、

「物の黑白も見えざるに松明出せ」

と呼ばはれば、二千軒の假屋より箙・靫・簑・笠・傘・箒に至る迄、火を付けて投出す。裾野の暗は忽ちに、百千の朝日影、一度に照す如くなり。（曾我會稽山）

二四　雅文二章

一　古戰場

井上文雄

戰の場に戎衣搔い繕ひ、秋の霜に露の命きえを爭ふ武士の習ばかり悲しきはあらざりけり。あな哀れ、君に仕へて、まめなる志を致さむ人、必ず孝の人なり。あな哀れ、亂世のあ

さましさ、忠臣・孝子大方幸なく、赤き骸さながら駒の蹄にかけられ、白き骨鋤かれて道の草を肥せり。あな哀れ、空しく塵ひぢと共にその名埋れけむ人いくそばくぞや。あな哀れ、すき殘したる片岡は、草刈るうなゐも靈ありなど憚りて、木繁き藪ふみ分けたる跡だになし。折れ傾きたる石の卒都婆半らは土、半らは苔に埋れて、彫りつけたりけむ文字樣も、その名と、共に消え果てにたり。あな哀れ、香華とる人しなければ、うかれし魂、今も猶涼しき國へ行きやらで、このわたりにやさまよふらむ。あな哀れ、雨そぼふる宵、月暗き曉、青き火もえ、叫ぶ聲聞ゆなど、媼翁は語るぞかし。思ふにかゝるわたりには、けしからぬ物の所得て、さる怪しの業見え

て人おどさむとするにこそ。　忠臣・孝子、君の爲、親の爲に棄てけむ身に、さるさがなき執殘して、めゝしう人に見ゆべしやは。　あな哀れ、さる事言ひ騷がるゝも、亦幸なきが上幸なきになむ。　あな哀れと涙さしぐまれて、野中の清水一ひさごをだに手向けばやと、塚のほとり近う立ち寄れば、蟻とかやいふ虫の羽生ひたるが、ばと群りかゝりたる耳のほとり、つき驚かす遠寺の鐘いと高う聞えて、あな哀れ〳〵。（文雄翁家集）

二　漁村

中島廣足

蜑の住處許り哀れなる物は無し。　いと便り無き海邊の、風もたまらぬ松蔭などに、唯假初に造りたる藁屋どもの樣、浪打寄せなば、軈て流れも失せぬべう、いと果敢なげに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどは、何心地かせましと思ひ遣るだに心細し。　夕つ方など、年老いたる男の子の手がらみしたるが、磯邊に立ちて、今日はいと遲くも有る哉など言ひつつ沖の方を守り居り。　孫どもにやあらむ、眞砂の上を走り歩きつゝ遊び居たるに、入日さしたる島影より、三つ二つ歸り來る舟の舵引をりて誇らしげなるを、老人待ち得顏に打ほゝ笑みたるは、幸多かりしにやと見ゆ。　渚に寄せて、跳び下るゝ儘に、網繰り寄せなど兎角しつゝ罵るに、男も女も數多出で來て、大きなる籠に魚ども取り入れつゝ擔ひもて行く樣、さはいへど賑はしげなり。　くゞつめく物持て來て、小き魚三つ四つ乞ひもて行く童などもあり。　總べて人多く

立ち込み騷ぎて、舟のあたり喧しく、差寄りて覗くべうもあらず。いと長き網の渚に掛け干したるを、繰りためて取入れなどやう〳〵靜まり行けば、此方彼方火ともしたる透影、壁もあらはにて、いと哀れに見ゆ。一夜宿りて見れば、浪風の響枕を搖りて、つゆまどろまれず。曉方隣の家々目覺まして、生業の事どもなるべし、怪しう聞き知らぬ事どもを、己がじし聲高に罵り交したるげに蜑の囀り、珍しうも可笑しうも。（櫻園文集）

大正國語讀本（修正版）卷十終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年九月廿六日修正印刷
大正七年九月三十日修正發行
大正七年十二月十二日修正再版印刷
大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版
全拾冊
定價
卷一・二　各金三拾四錢
卷三・四　各金三拾錢
自卷五至卷十　各金三拾錢

著作者　東京市麴町區土手三番町三十六番地　保科孝一
著作權所有
發行者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店